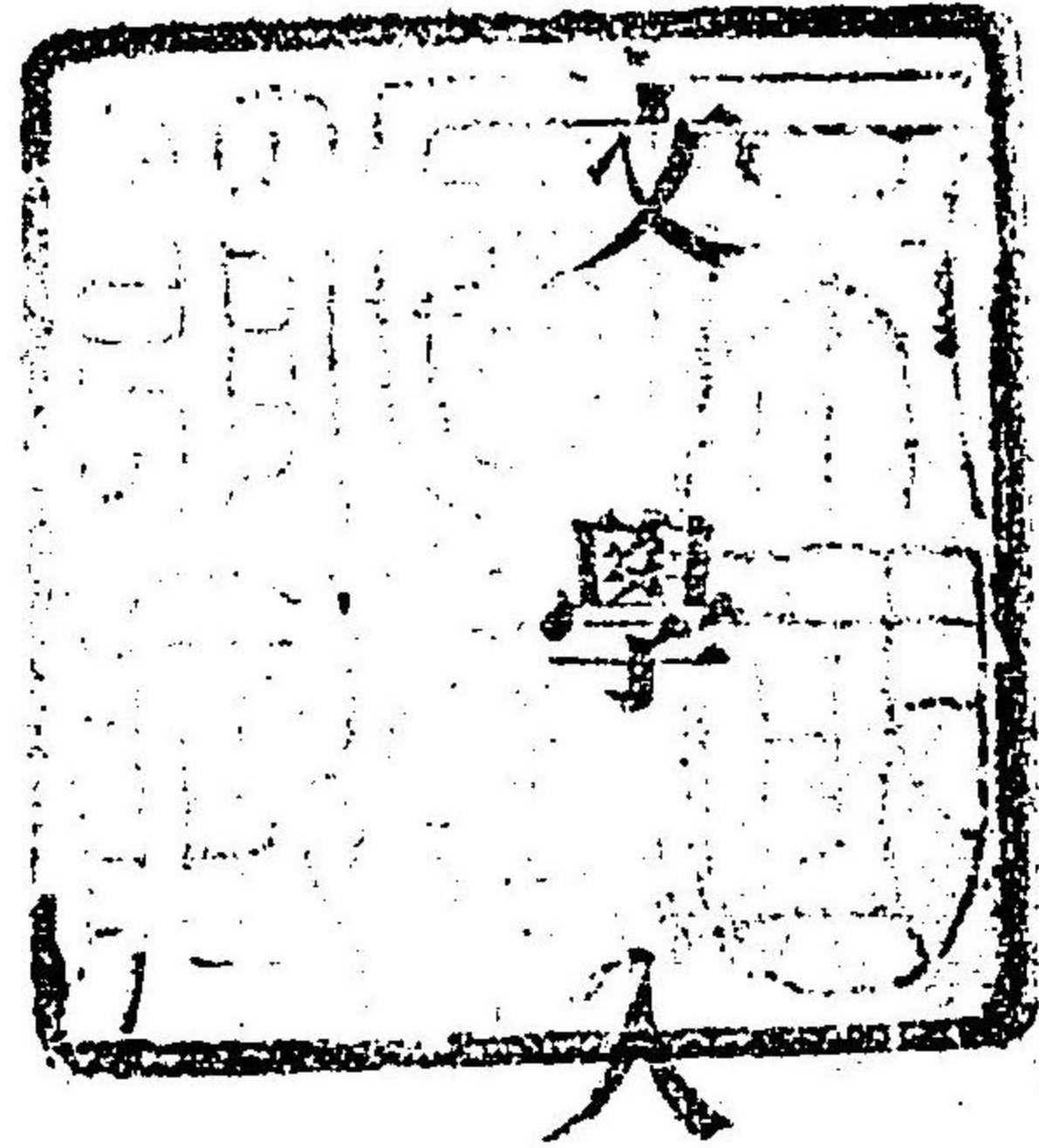


文學入門



門

生
山
長
江
著

明治
40 11 22
内交

文學入門序

學と名のつくものは世の中に澤山あるが、大抵は其性質も範圍も研究の態度も方法も目的も一定してゐる。従つていくら門外漢でも多少の教育さへあれば、こんなものだらう位の想像はつく。所が文學になると同じく學の字はついて居るが、理學化學動物植物の諸科學とは丸で趣を異にして極めて曖昧なものになつてゐる。學と云ふ名はあるがどこが學だか薩張り分らない。

普通の諸科學はある現象の研究から出立して此現象と彼現象との關係を明瞭に抽出するものである。では文學では

何の現象を研究して居るかと言ふと一寸返事に困る。では何にも研究してゐないのかと云ふと大に研究して居る。小説でも詩歌でも戯曲でもみんな人間と自然の研究から出来たものである。たゞ研究の態度が普通の諸科學と趣を異にして居るのみである。たゞ此態度が複雑なため區域の判然せぬ爲め、研究者自身も此態度をとりまとめて人に話す事が出来ない。だから自身は述作の際此一種の研究を實行してゐるにも拘らず、一旦質問に出逢ふと満足な返事が出来ない。文學が曖昧な原因の一つは全く茲にある。

夫から作る方の側でなく、作つたものを取り扱ふ側――

即ち鑑賞家とか批評家とか云ふ人々の態度から云つても同様の観がある。此人々は作物を材料として研究するのだから、此點に於ては動物學者の動物を材料としたり、植物學者の植物を材料とするのと一般ではあるし、又現象を研究すると云ふ點から見ても似ては居るが、偕此研究の態度はと云ふと外のは餘程違つてゐる。餘程違つて居ても、明瞭に區別が出来る様に違つて居るのは結構であるが、ここでも亦曖昧に違つてゐる。古來からして批評家の立場とか、觀察點を調べて見ると、毫も貫ぬいて居ない、めい／＼違つて居る。單にめい／＼違つてゐる丈ならよいが、一人

が時と場合によつて違つてゐる。それも大體の計畫を立てた上、確然たる主義から割り出して、臨機應變に違つて行くなら見當もつゝが矢鱈に違ふのである。行き當りばつたり違ひである。其都度々に思ひついた事をいゝ加減に云ふ様な違ひ方である。其日暮しの違ひ方である。従つて自分で自分の研究の結果をまとめる譯にも行かず、一口に人に話す事も出来ず、又は傍觀者が是等の人の態度を一括してかう云ふ態度で研究してゐるから、普通の科學者の態度とはこゝ迄が同じで、こゝから分岐してくると明瞭に呑み込む譯にも行かない。文學が曖昧な源因の二は茲にある。

早い話が古來から文學者杯が文學は如何なるものぞと云ふ質問に對して答へた文學の定義を見ると餘程面白い。千差萬別である。のみならず雲を攫んで霞に腰を掛けてゐる様な不得要領なものばかりである。それは眞赤な嘘だとは云はれない代りに成程文學はそんなものですかと合點の行くものは殆んどない。時々引用されるブルツクの定義などは其好例である。

それでも構はない。が時代が進むと構はなくなない人が澤山出來てくる。構はなくなない人が澤山にあると、文學とはどんなものであるか、文學上の創作とはどんな研究から出

來るものか、批評とはどんな研究から出来るものか、文學の歴史とはどんなものかなど、續々問題が出て來る。續々問題の解決が必要になつてくる。

文學の性質も範圍も曖昧であつた爲め、又是等を明めやうとする様な好奇心に富んだ傾向の人が此方面に出なかつた爲め、此種の問題は等閑に附せられて居た。現に大學に純文學科があつても其目的も課目も方法も頗る若かとした根底の上に確立されて居らんのは全く此方面に於ける智識が吾人の頭腦に乏しい爲めと云はねばならぬ。

生田君の著書は其名の示す如く文學入門である。入門で

はあるが以上の如く此種の著書が拂底の今日、ことに人事百般の新智識の要求が熾なる今日の日本に在つては非常に有益なものと信ずる。余も色々な意味に於て文學の研究者である。ことに生田君の著はされた書物の内容の如き問題に就ては尠からぬ興味を有して居る。因つて數言を卷頭にづらねて刊行の主意を賛成すると共に大に之を江湖の青年の學徒に推薦するのである。

明治四十年十一月

夏目金之助

文學入門目次

第一章 文學とは如何なるものぞ……………一

凡べて定義を下すと云ふことの困難—定義の價值
文學の定義

第二章 文學と文士生活……………四

文學は道樂也—道樂の意義—道樂の價值—高尚な
る道樂としての文學—文學は最も重要なる道樂也
—文學と職業—職人若くは藝術家—戯作者—精神
界の事業と報酬—所謂文士生活—原稿料

第三章 文學者たるべき資格(一)……………一〇

先天的素質と後天的修養—精神と肉體—耳の感覺
と音樂者—目の感覺と畫家—手足—容貌風采—體

康——病床に於ける事業

第四章 文學者たるべき資格(二)……………三〇

精神界の事業——精神上素質——心作用の解剖——智力
——意志——感情——文學者は感情的なるべし——近代文
學の智的傾向——氣質の分類——多血質——粘液質——膽
汁質——神經質——文學者は神經質なるべし——文學者
はまた空想に富まざるべからず——文學者は更にま
た好奇心に富まざるべからず——好奇心と人生の經
験——好奇心と天才の戀

第五章 文學者たるべき資格と天才……………三三

天才とは何ぞや——天才は藝術家にのみ限るべから
ず——天才と常人——程度の相違——種類の差別——文學
上の天才とは如何なるものぞ——天才と常識——天才
は必ずしも狂人に非ず——天才の尊重

第六章 文學者たるべき資格と男女兩性……………三五

男女兩性の得失長短——婦人固より文學者たること
を得——文學史上の實例——二者何れかより多く文學
者たるに適するか——婦人は男子よりも感情的也——
婦人はまた男子よりも神經質也——男子婦人よりも
空想に富む——男子はまた婦人よりも好奇心に富む
——婦人に適する文學——叙情詩——男子に適する文學
——叙事詩——具體的説明——除外例

第七章 文學者と修養……………三七

素質と修養——天才——修養の第一は讀書也——文學者
と學者——修養の第二は經驗也——苦勞人——修養の第
三は試作也

第八章 讀書の材料及び方法……………三六

如何なる種類のものを讀むべきか——不朽の大作——

第九章 經驗と觀察

讀むときの心得——必ずしも精讀するの必要なし——
 會心の文字——音讀と聲調の美——拔萃——國文學に於
 ける名著——維新前——維新後——漢文學——西洋文學——
 外國語の勉強——英文學——大陸文學——新刊物——文學
 以外の讀書——圖書館及び貸本屋

第十章 創作の稽古

苦がき經驗——人は各其經驗を誇大して考ふるもの
 也——人生に對する各自の管見——人生の一面——廣き
 經驗と深き經驗——自ら求めて苦むの要ありや——寫
 生帳と深刻なる經驗——天才と悲劇的運命——藝術に
 於ける報價——經驗は即ち運命也——觀察力の修養——
 多次の練習——客觀的態度

創作の稽古は其早きを患へず——模倣——獨創——個人
 性——模倣すべきもの——模倣の方法——刺激と暗示——

第十一章 批評と批評家

シエクスピア——ダンマントオ——小栗風葉氏と與謝
 野寛氏——正直に書くと云ふ事——事實らしく書くと
 云ふこと——描寫の練習と寫生——創作の材料と寫生
 ——推敲——幸田露伴氏と故尾崎紅葉氏——簡潔と冗漫
 ——まづその筆をのばすべし——絢爛と平淡——試作物
 を活字にするの利害

批評家の任務——批評と創作との輕重——批評は創作
 の奴隸にあらず——批評の兩面——鑑賞と説明——批評
 家たるべき資格——作家肌と學者肌——學者たるべき
 素質と修養

第十二章 文學上の翻譯

翻譯家の任務と電話交換手——翻譯は文學上第二段
 の事業也——模倣踏襲の時代——大天才の出づべき時
 にあらず——翻譯家の資格——外國語と文學の趣味

附 録 文藝雜話目次

- 自然主義と寫實主義……………一
- 象徴主義……………三
- 趣味の廣狹……………三五
- 家庭に於ける文學の趣味……………四〇
- 小説に對する首都の勢力……………五五

文學入門

文學士 生田長江著

第一章 文學とは如何なるものぞ

凡べて定義を下すと云ふことの困難——定義の
價值——文學の定義

文學とは抑も如何なるものぞ。之に答へるのが文學の定義である。

世の中に何が面倒なものと云つて、物の定義を下すほど面倒臭いものは無い。

假りに今、人間の定義を下して、兩足で立つ動物だと云はうなら、犬でも猫でも、偶には兩足で立つと突込まれる。それならば、常に兩足で立つ動物な

りと改めて見たらばどうかと云ふに、赤坊は四這ひをやりませぬ、老人は三本足で歩きます、臥るときはお互様足はいりませんと、意地悪くまた冷かされる。——定義ほど手数のかゝるものはない、厄介なものはない。

所で、手数のかゝる辭に、厄介なくせに、餘り役に立たないのがまた此定義である。

『文學とは、美しきは言葉を以て、美はしき感情を云ひ現はすものなり』と云ひ、『文學とは、世相の闡明なり』と云ひ、或は『文學とは人生の批評也』と云ふ、いづれも随分と骨の折れた詮義ではあらうなれど、倍てそれ程の有難味は無い。少くとも『文學』の『入門』者に對して、かう云ふ抽象的の定義が與ふる利益は、極めて僅かなるものであらうと思ふ。

文學とは小説の事である、脚本のことである、俳句、和歌、新體詩のこと

である——是で澤山だ。

實業、政治は文學でない。數學、理化學、天文學は文學でない。論理學、心理學、社會學は文學でない。史學、語學も文學でない、少くとも純文學でない、——是で充分である。是れ以上に、深く立入つて文學の定義を論ずる必要はないのである。

第二章 文學と文士生活

文學は道樂也——道樂の意義——道樂の價值——高尙なる道樂としての文學——文學は最も重寶なる道樂也——文學と職業——藝人もしくは藝術家——戯作者——精神界の事業と報酬——所謂文士生活——原稿料

文學元來の性質は遊戯である。小説や脚本を読むのは、たゞ面白いから讀むのである。俳句や、和歌や、新體詩などを作るのは、只だ作つて見たいから作るのである。讀むたり、作つたりする結果は、學問にもなり、品性の陶冶にもなり、また生活上の方便にもならうけれど、それは自らにして來る利益で、最初から目的として居たものではない。乃ち文學は、琴や、尺八や、茶の湯や、活花などと同じやうに、圍碁や、將棋や、トランプ

などと同じやうに、遊戯である、娛樂である、また實に道樂である。

道樂は、道樂の爲めの道樂であつて、他に何等かの利益を目的として居るならば、それはもう道樂でない。烏屋の烏飼は道樂でない。植木屋の園藝は道樂でない。大星由良之助の放蕩も實のところは道樂でなかつた。

斯くの如く、道樂には是れと云ふ一定の目的があるものではないけれど、
 ちかし、人間の生活上無くて濟むべきものではない。生れて間もない赤ン坊
 でさへも、用のないのに手足を動かす、蓋し道樂のそもくかも知れぬ。七
 ツ、八ツ、十二三位迄は遊戯専門の時代とも云はうか。學生の時代を過ぎて
 實際社會の生活に入つても、如何に多忙繁劇なる生活に入つても、娛樂がな
 くては堪へられぬ。何等かの道樂がなくては生きられぬ。

道樂には種々の道樂がある。春曉花を愛し、秋夜月を賞するも道樂であれ

ば、寫眞器械を提げ、獵銃を肩にして野山をかけ廻るのも道樂である。書畫骨董の類を遊ぶのも道樂である。謠の稽古も道樂である。買ふ、飲む、打つも道樂である。かくの如く種々なる道樂がある中にも、自から品の良いものと、品の悪いものとの別がある。高尚な道樂と下等な道樂との二通りがある。而して高尚な道樂は、人の品性を高尚にし、下等な道樂は、人の人格を下劣にする。或は、上品な人は上品な道樂を好み、下品な人は下品な道樂を喜ぶ。人は其選ぶところの道樂によつて、品性人格の高下が推察されるものである。

文學は、あらゆる道樂の中で、最も高尚なるもの、一つである、品格の高い人は文學を好み、文學を好む人は、また愈々品格が高くなる。勿論詩を作るのは、田を作る丈けの收利が無いかも知れぬ。小説や脚本を讀むで得る智

識は、理化學を研究して得るものより少いかも知れぬ。さかし、人間に大切なる品性の陶冶、人格の修養と云ふ點から考へて見れば、また、人間はどの道何等かの道樂がなくては濟まぬものとすれば、文學ほど結構な道樂はない。爾餘の下等なる道樂を打棄ても、此文學を道樂にすべしだ。自分がかう云ふ見地からして、常に文學趣味の普及と云ふことを切望して止まないものである。

翻つてまた之を思ふに、道樂には、誰でもかかれでも試みることの出来る道樂と、出来ない道樂との二種類がある。例へば音樂の如き、聲樂の方面をやるならば、生れつき好い喉を有つて居なければならぬし、器樂をやるならば手端が器用でなければならぬ。また一般に音樂をやらうと云ふ人は耳の感覺が常人よりもすぐれて鋭敏細緻でなければならぬ。繪畫をやるには、色彩の

感覺が秀れて居る上に、是も手端の器用と云ふことが伴はなければならぬ、俳優は容貌風姿の上に、角力は體力の上に、一定の資格が必要である、乃ち、弱蟲では角力となれぬ、醜男は俳優になれぬと云ふわけである。色盲や、盲や、それでなくとも、目の感覺の劣等な人間、手端の無器用な人間はいくら繪畫をやらうと思つてもやる事が出来ぬ。耳の悪いもの、喉の悪いもの、指頭の無器用なものは、いくら音樂をやらうと思つてもやる事が出来ぬと云ふ次第である。ところが文學はさうでない。

文學と云ふ道樂は、殆んど特殊の天賦を必要としない。普通の人情に通じ一般の義理を解して居さへすれば、文學は誰れにでもわかる、誰にでもやれる。各人皆それ相應の趣味を有つことが出来るのである。是が第一に文學が重寶なる點である。

第二に、文學と云ふ道樂は、相手なしでやることの出来る道樂である。自分丈け獨りで、勝手な讀物を取りよせて、獨りでよむ。興が来れば自分で筆をとる。凡べて相手なしにやれる道樂である。だから如何なる交通不便の山間僻地に生れた人も、絶海の孤島に流人となつて、語るに友なくして暮す人も、懷に會心の詩集一冊あらば、手に一管の筆あらば、文學は則ち味へるのである。

第三に、文學は如何なる時にも楽しむことが出来る。忙しい時は車の上、船の上で、二頁三頁讀む丈けでも茶を入れて置ける。一日の用が済むだあとでは、燈の盡くるまで讀み明すことも出来る。見飽かぬ中に暮の下りる氣遣もなく、聞飽きた後まで、聞かせらるゝ心配もない。閑あれば讀み、興湧けば筆をとる。何を讀んでも人に迷惑をかける憂はなく、何處で筆を擱いても人

の機嫌を損する恐れはない。是ほど自由の利く、氣の置けない道樂はなからう。

第四に、文學は最も金のかゝらぬ道樂である。道樂となると大抵は金のかかるものだ。其日暮しの貧乏人に書畫骨董の道樂でもあるまいし、園藝も温室の一つ二つ有たなくてはつまるまい。寫真道樂は若旦那の道樂と限られて居る。銃獵には鐵砲の税、犬の税がかかる。芝居、角力も安くは上らぬ。音樂も、今日のところ、餘程貴族的なもので、樂器一つ購入かひいれるのにも、まともつた金がなくてはならぬ。春秋二回の音樂學校演奏會にすら、普通の學生々活を送つて居るものは、入場券を買ひかねる有様である。ところが文學は安直なものだ。セツセル本、レクラム本でも仕入れたなら、古今東西の大文學が、皆悉く十錢乃至十二錢で仕入れられる。以つて一斑を推すべしだ。

で、文學は右に述べたる通り、本來は遊戲であり、娛樂であり、また實に道樂であるのだが、或る場合には一個の事業、職業となるものである。

蓋し、この人間社會と云ふものは、其初め極めて單純なる生活よりして漸次複雑の發達進歩を遂ぐるに至つたもので、其最も單純なる時代にあつては人々各自單獨孤立の生活をして居た。即ち自分で家屋を建築し、自分で衣服を作り、自分で食物を調へ、また自分で生命財産の保護に任じて居た。一言にして之を云はゞ、人各士農工商を兼ねて居るのである。ところが社會のだん／＼と進歩發達し來るに従ひ、分業と云ふことが始まり、家を建てる人は家を建てることばかり専門に、食物を調へるもの、人の生命財産を保護するものなども、またそれ／＼の任務を専門にやるやうになつて來た。

娛樂、遊戲と云ふやうなものも、始めは人々自分で自分の娛樂遊戲を作つて居たのであるが、だん／＼と社會が分業的になるにつれ、他人の娛樂遊戲を助け、其材料を供給し、其方法を教ゆる職業が出来た。手品師がそれである。輕業師がそれである。落語家、役者などがまたそれである。

文學も本來は遊戲であり、娛樂であるに係はらず、社會制度の發達につれて、一個の専門分業として獨立し、所謂文學者もしくは文士なるものを生ずるに至つたのは、決して怪むべきではない。

文學者、文士をも藝人の一種として云はう、藝人と云ふ言葉に悪い聯想が伴ふと云ふならば、藝術家の一種として之を云はう。藝人もしくは藝術家は少しも耻づべく、卑むべき職掌ではない。勞働と云ふものが神聖なる限り、藝人もしくは藝術家また一種の勞働者なる限り、正直なる勞働によつて衣食

する彼等に、何の耻づべきところがあるらう、何の卑むべきところがあるらうぞ。

藝人、藝術家にして、若し卑むべく耻づべきところのものあらば、それは彼等が藝人、藝術家なるが爲めに非ずして、むしろ卑むべき娛樂、耻づべき遊戯を補助し、供給するが爲めである。

文學は元來高尚なる道樂である、最も高尚なる道樂の一である。文學者、文士が文學者、文士たるを耻とすべき理由はない。

昔は純文學の作者を戯作者と呼び、ひどく卑むたものだが、それは無理もない話である。一方に於ては文學、否な藝術の尊嚴と云ふものが一般に認められなかつたし、また一方に於ては、所謂戯作者の手にあるものは、事實戯作であつて、眞面目なる文學上の意義は殆んど有つて居なかつた、つまり文學の名を以て呼ぶに足らなかつたのであるからして、それが社會上甚しく

重きを置かれなかつたのも怪むべきでない。まかし、さう云ふ舊時代の風習をいつまでも持續して、今に戯作者氣質を脱しない者があるならば、誠に不心得千万なことである、また一方には、新興の文學が己に眞面目の活動を始めて居るにもかゝはらず、其大事實を看過して、今尙ほ昔の如く、文學者、文士に對して敬意を拂ふことを知らない人が居るならば、遺憾至極の事である。

世間には、往々にしてまたかう云ふ誤解がある。文學は誠に高尚なる事業である、宗教や教育などと同じく、神聖なる精神界の事業である。かゝの如き事業は、空しく獻身的になさるべきもので、報酬を取るのには怪しからぬ、之でもつて衣食するなどは不心得であると、かう云ふ議論である。之も一應は尤もな議論で、殊に文學と云ふものをそれほどに尊んでくれたのは、

誠に有難いわけではあるが、まかした思遣りのない、殘酷な議論でもある。

文學者文士でも矢張り人間である以上、食はずには居られぬ。食ふ爲めには稼がねばならぬ。稼がずに居て食へるものは殿様である、長者様である。殿様長者様に立派な文學が出来たらば誠に結構な話だが、偕てどうも出来ないのが常。不朽の文學は所詮額の汗から生れるのだ。稼いで食ふ人が作り出すのだ。乃ち文學者、文士と云ふ社會階級がなければならぬのである。

森鷗外氏の如きは、身陸軍々醫監の職に在つて、其間評論と創作と並せて筆を執り、長く我が文壇の大立物となつて居られる。あゝ云ふ具合にやつたらばいゝではないかと云ふ人があるかも知らぬが、あゝ云ふ事は森氏だから出来たのだ。森氏のやうな境遇に居、森氏のやうな精力がなければ出来ない

のだ。其證據には森氏を除いて他に森氏のやうな人は見受けられぬ。且又、忌憚なきところを云へば、森氏の如きも、純然たる文學者となられるならば、陸軍の得失は知らず、文壇はたしかに今よりもより多く利益あるに違いないのである。乃ち文學の爲めを思へば、文學者になつて戴きたいのである。尙ほ氏の外、長谷川四迷(二葉亭)上田敏諸氏にも他の職業をやめて、純然たる文學者生活を送つて貰ひたいものである。

更めて云ふまでもなく、文學を味はふとする人は、皆がみな、文學者にならねばならぬと云ふのではない、またならうとしたところでなれるものではない。文學を職業として立たうと云ふ人は、一定の資格がある。資格があつてもなるまいと思ふものを無理にならす必要もない。あかし、其資格もあり、自分でもならうと云ふ望みがある場合には、眞面目に、將來の職業として之

を選ぶのは、何の憚るべきところもない。他人の前に秘して置く必要もない。他の軍人になるものが、軍人になりますと公言する如く、教師になるものが、教師になりますと公言する如く、文學者にならうと云ふ人はまた、大手を振つて文學者にならうと思ひますと公言するのには、聊かの遠慮もいらないのである。

固より今日の處では、文學がまだ一般に社會上勢力を有すること少いからして、生活はなかく樂でない。小説家で流行兒となつて居る二三の人などは例外として、まづ文學者は貧乏なものとしてある。小説でも二流三流と下れば、韻文の作家や評論家と同様に、報酬は極めて少く、文壇知名の士百人の中、七十人、八十人までは、地方の中學校の先生よりも、苦しい生活をして居るものと思へば、太した間違はないのである。

かう云つた丈で、まだ充分に文學者の生活難がお解りにならぬならば、昨今に於ける原稿料の標準と云ふものを、一寸お話して見ませう。

單行本として出版させる場合は別として、一般に、新小説、文藝俱樂部等の小説雑誌、及び各新聞に出る小説などは、餘程の大家でも一枚が七八十錢、壹圓の上に出る人は僅かに指を屈するばかりしかない。大抵は四五十錢、甚しきに至つては、十五錢二十錢位でも書いて居るのである。小説すらさうである。短歌、新體詩などと來ると、實に言語道斷である。

かゝる次第であるからして、將來文學者として立たうと思ふ諸君は、貧乏を覺悟してかゝらねばならぬ。一時の貧乏ではない、殆んど一生の貧乏を豫期してかゝらねばならぬ、貧乏に堪へ得ない人、自分ひとりほどの貧乏にも堪へ得るけれど、打つちやつて置けない繁累があると云ふ人、さう云ふ人

は文學者にならうなどと思立つべからずだ。文學者の生活は二〇三高地よりも危い、決死の勇氣あるものに非ずむば、到底飛込まれるところではないのである。

第三章 文學者たるべき資格 (一)

先天的素質と後天的修養——精神と肉體——耳の
感覺と音楽者——目の感覺と畫家——手足——容貌
風采——健康——病床に於ける事業

誰でもかれでもみな、文學者になれるものでないと云ふことは、前の章に於ても已に述べて置いた。文學者となるには、文學者となる丈の資格がある。其資格は、人の生れながらにして有する性質が、文學者となるに適當して居なければならぬと云ふ、是が第一。第二は、文學者にならうと云ふ人の特に心掛けねばならぬ修養である。難しい言葉で云ふと、文學者にならうと云ふ人は、一定の先天的素質と、一定の後天的修養とがなくてはならぬ。——先づ先天的の素質から話して見よう。

人の素質を、肉體上の素質と、精神上の素質とに分け、肉體上の素質から吟味して見よう。人はそもそも文學者となる爲めに、どう云ふ肉體を以て生れて來ねばならぬか。

耳の官能の鋭敏なる人、即ち音楽者の素質を有する人は、文章の上にも其素質が影響して、所謂音楽的な、調子のいゝ作物を得ると云ふことは、固より否定し難い事實である。けれども、さう云ふ特徴は無いよりもあるがよいと云ふまで、つまり便利など云ふまで、必要な條件ではないのだ。世界の有名なる文學者にして、全然音楽の趣味を解しないと云はれて居た人は随分とある。露西亞の大小説家ツルゲネフなども音楽はむしろ解らなかつた方であると聞く。所詮文學者は人並すぐれた耳を持たねばならぬと云ふことはない。

次に眼はどうであるか。近眼で文學がやれぬと云ふことは勿論ない。藐
 視みでも、色盲でも勿論文學はやれるのである。けれども全然繪畫の趣味を
 有して居なくとも文學はやれるであらうか。文章には所謂繪畫的なる文章が
 あつて、一種獨得の面白味をもつて居ることは更めて云ふまでもない。かく
 の如き文章をよくする人が、よくしない人に比して、それ丈けのハンディ・
 ケヤツプを有することは争はれぬ。がしかし、之も畢竟は、便利なる素質と云
 ふに止まる。之なきの故に、文學者となれないこともなし、大文學を作り出
 すことが出来ないと云ふこともない。人はどんな目を以て居ても、文學をや
 る上に差支はないのである。

手はどうか、足はどうかと云ふに、手品師でなくとも、輕業師でなくとも
 文學のやれるところを見れば、此方面に格別の資格が入用であるとは思はれ

ぬ。手蹟なども、一向文學者になれる、なれぬを決定する標準ではないと見
 えて、知名の文人に随分の惡筆を見受ける。

それならば、容貌、風采と云ふやうなものはどうかと云ふに、之も一向制
 限はないらしく思はれる。俳優などは、非常な美人、美男子でないまでも、
 豊かなる表情を有つた容貌でなければならぬ。政治家なども、公衆の前に立
 つて演説する時などを考へると、可なりの風采がなくては不都合だ。老かる
 に文學者は、折々其寫眞を文學雜誌の口繪にはさまれる位のもので、それさ
 へも避ければ避けられるもので、まづ自分でも立派な容貌風采でないと思へ
 ば、世間の人に見て貰はないでも濟ませる。乃ち此方面に何等の制限はない
 やうに思ふ。最も、男がよくなければ女がほれぬ。女がほれなければ戀愛を
 描くべき大半の権利を失ふなどと云ふ論理も立たないことはないが、それは

また其反對に、男がわるくても女に惚れられるとは出来る、ほれて、ほれられなければ失戀である。失戀はやがて戀愛の二分の一以上であると云ふやうな反面の眞理を以て帳消しにして仕舞へるので、詮ずるところ文學者にはどんな醜男醜婦でもなり得られるのである。其證據には、古來の大文豪とも云はれる人々の、大半は皆風采のあがらなかつた方である。ゲエテや、シェレエや、バイロンなどは例外だが、希臘の女詩人で、後には天上の星とまで崇められたサッフォなども、史家の考證によると、寧ろ女振りのよくない方であつたと云ふ。歐洲近代の諸作家を見ても、是はと云ふやうなのは、寧ろ少い。最後の吟味として身體の健康と云ふことを考らべて見ようか。換言すれば文學者は生れつき病身であつてはいけなしかどうかと云ふことを吟味して見よう。

健康は誰しも欲しい。文學者には限らず、軍人は勿論、實業家でも、政治家でも皆健康な身體を有ちたいと思ふ。が、其中にも健康でなければ全然つとまらぬ仕事と、不自由は感じながらも兎に角つとまる仕事との二通りがある。宗教家文學者などは後者に屬する。宗教家文學者なども、大なる事業をする上に、大なる根氣精力の入用なことは勿論である。そして大なる根氣精力は、一般に健康なる身體の所産である以上、彼等とても病身であつていとは云はれないやうだ。あかしながら、彼等は其従ふところの事業の特質として、病身と云ふこと、病苦と云ふことそれ自體が、彼等の精神上刺激となつて、其向上心に^{つちか}培ひ、美しい修養の花を開かせることがある。そして他の健康なる人々が爲し得ないやうな事業をその病の爲めに爲し得ることがある。あかもそれが太しく珍らしくないのである。

蓋し、人の信仰の道に入るや、種々なる機縁にもよることながら、基督教に所謂『試み』が最も有力なる動機となるべきは言を須たぬ。『試み』とは神が人をして自ら省みしめむが爲めに下し玉ふ痛ましき人生の経験である。人生の苦痛である。人生の苦痛には種々あるが中に、病氣はその重なるもの、一つである。特に、生れながらにして病身なるは、人生歡樂の翼をもぎ取られたやうなもので、是より淋しく、是より心元なきはない。ところで、宗教は人生苦闘の産物であるとするれば、病氣病苦の中よりして、熱烈なる信仰の火が燃え上つて、宗教史上に赫々たる光明を輝すに至るのは怪むに足らないことである。

近く物故せられた文壇の名士高山樗牛、近藤燕處、網島梁川等の諸氏に就いて云つて見ても、是等の諸氏が冷索なる半生の談理を棄て、觀心修證の一

大事に傾倒せらるゝに至つたのは、各々不治の疾を得てからである。否な、むしろ不治の疾を得たが爲めである。

文學も、之を人生の批判であると見れば、宗教的自覺の基礎あることを必要とするは勿論、従つて病患を天與の恩寵と感ずる場合が幾度もある。また文學を人間生活の反映であると思れば、人間生活の最も深刻なところ、最も痛切なところが、病室の窓を通して最も明かに見得られる以上、最も深刻なる文學、最も痛切なる文學が、屢々病身なる文人の手によつて、また時には瀕死の病床よりして作り出さるゝことは、敢へて怪むに足らないのである。

以上述べたるところを總括して之を云へば、人の文學者となるに必要な先天的の肉體上素質には、格別の制限がない。肉體上かう云ふ素質を有つて居

なければならぬと云ふことはない。つまり肉體はどんな肉體を有つて居ても文學者にはなれるのである。單にどんな肉體を有つて居ても差支がないと云ふばかりでなく、身體の健康などは、ない方が却つて好都合な場合すらもあるのである。

此病身な方が却つて好都合だと云ふ點、是れは大に注意すべき事である。讀者諸君の中若し生れながらにして病弱、到底他の實世間の活動に堪へない人ならば、また已に病床の人となつて朝夕藥籠と相親むで居る人ならば、それ等の諸君よ、失望し給ふな。諸君が事業をなすべき分野は尙ほ殘されてある。諸君はまだ宗教家となつて人を救ふことが出来る。文學者となつて不朽の作を世に傳へることが出来る。諸君は病あるが爲めに此業を廢するの要なきのみならず、むしろ是あるが爲めの故に、いよく文學者たり、宗教家た

る資格があるのである。

第四章 文學者たるべき資格 (三)

精神界の事業——精神上素質——心作用の解剖——
 智力——意志——感情——文學者は感情的なるべし
 ——近代文學の智的傾向——氣質の分類——多血質
 ——粘液質——膽汁質——神經質——文學者は神經質
 なるべし——文學者はまた空想に富まざるべ
 からず——文學者は更にまた好奇心に富まざるべ
 からず——好奇心と人生の經驗——好奇心と天才
 の戀

前章に於いても述べたる通り、文學者となるには殆んど肉體上素質の制限がない、此肉體上素質の制限がないと云ふのは、とりも直さず、文學者の事業の肉體的動作に須^またざるもの、一に精神上の活動に屬するものなることを示して居るのである。

文學は實に人の精神上能力に基づく精神上の活動である。精神上文學者に特有なる先天的素質のあるべきは勿論である。

人間の精神上素質を在來の心理學に従つて解剖すれば、智力、意志、感情の三方面に分れる。或は人の心のはたらきは、此三作用に分つことが出来る。先づ此三作用から吟味して見よう。智力は記憶、聯想、推理等のはたらきを爲すものである。是等のはたらきを最も必要とするものは學者である。文學者とても全然此方面の素質が缺けていゝわけではないのであるが、あかし、此方面に於て特に他に秀^すれて居ることを要しない。文學者は特に智力的人物たることを要しない。平たく云へば文學は所謂學者肌の人、理屈ッばい人ではなくともやれるものである。雷に智力的人物たるを要しないのみならず、智力的なるが爲めに文學者特に、創作家となることが出来ないことがある。換言す

れば理屈ッばい人、學者肌の人には却つて創作などは不向きであると云ふことになるのである。だから、文學博士で満足な歌一つ咏めない人があつても怪むに足らず、小説新體詩の大家に形式論理一冊目を通さない人があつても笑ふべきことでない。所詮學者の生命は智力であるけれど、智力は特に尙ふべき文學者の素質ではないのである。

意志は決斷、忍耐、勇氣、反抗心、克己等のはたらきとなつて現はれる。人は誰しも皆相應に具へても居るし、また大に具へて居たいものである。實世間の活動は主として此作用から生れるので、軍人、政治家、實業家等にあつては實に根本の生命を爲すものである。借金するのは悪いことだ、もうすまいと思ふのも一時、苦しくなればまたついやる、意志が弱いのである。酒をよさう、煙草をよさう、朝寢をよさう、悪い習慣や癖をよして仕舞はうと

決心するのはまだしも意志のはたらきである。堅く決心した三日から、直ぐと誓を破ぶつて、一寸一服やり、一盃だけ附合ひ、今朝だけと申譯をして朝寢坊をやる、凡べて是れ意志が弱いのである。こんなことで立派な實業家になれる氣遣はない。大政治家、大軍人にもなれさうにない。ところが文學の方はどうかと云ふに強^{あなが}ちさうでない。随分と決斷の悪い、養え切らないやうな人にも、詩は出来る。恐ろしく克己力の乏しい、素行の修らないやうな人にも、小説はかける。詩人文學者たるべく、薄志弱行は必ずしも障りとはならないのである。管に薄志弱行が障りとならないばかりでなく、所謂意志的の人物、特に意志の作用のみが秀でた人物は、寧ろ文學に適しない、乃ち文學者にもなれず、また全然文學が解らないものさへあるのである。

感情は喜怒哀樂、憐憫、惻隱、同情、愛情、憧憬、嫌惡、怨恨等の形をと

つて現はれるもの。人は何人と雖之を有して居るし、また有しなければならぬものであるが。此方面の能力が特に發達して居るものは、詩人文學者の間に多いのである。蓋し、他の方面の事業と云ふものは、主として之を智力もしくは意志のはたらきに須ち、感情に須つ場合が極めて少いのみならず、また時には、あまりに感情の鋭きが爲めに、細かなるが爲めに、煩はされることがある。乃ち世間普通の活動に於ては、所謂感情的の人物は不適當である危険であるとして居る。ところが、藝術特に文學にあつては、創作鑑賞ともに、其基礎をなすところのものは、智力でもなく、意志でもなく、實に此感情のはたらきである。從來文學なるものが、専ら人間の感情を發表したるものとしてのみ考へられて居たのは、正鵠を得ないとしたところで、兎に角文學の中心生命をなすものゝ感情なるは争ひ難い。従つて文學者には先天的に

感情的の素質がなくてはならぬ。誠實なる感情、美しき感情、熱烈なる感情等がなければならぬ。だから古來の有名なる文學者は凡べて皆、感情的の人物であつた。嬉しい時には雀躍こをどりして喜び、悲しい時には場所柄をも構はず泣き、憎いものは無暗に憎み、可愛ゆいものは矢鱈やたらに可愛ゆがる人が多かつた。惚れッぽいと同時に、よく人と衝突した。

之を要するに、人の心を智情意の三作用に解剖して云へば、文學者となるべき人は、特に感情のはたらきが優つて居なければならぬ。所謂感情的の間であることを要するのである。がしかし、かくの如く云へばとて、他の意志や、智力やが、常人のそれより劣つて居てもいゝと云ふのではない。大なる詩人文學者は、意志、智力も常人に劣らない上に、尙ほ特に感情がまさつて居るのである。とりわけ、近代の文學などには、餘程智力的要素が重じら

れて居るので、小規模の叙情詩位やるのにはさうでもないが、苟くも小説、戯曲等の方面から這入つて、近代文藝の大思潮に棹ささうと云ふほどの志があるならば、智力の修養と云ふことをも決して等閑視してはならぬ。否な、先天的に智的能力の乏しい人などは、其功名心の大半を放棄しなければならぬのである。

次ぎには、人間の氣質と云ふものを、多血質、粘液質、胆汁質、神経質の四つに分けて文學者たるべき先天的の資格を吟味して見よう。

多血質と云ふのは、其文字が已に示して居るやうに、貧血に對する多血で肉付き豊かに血色も好い。始終快活で、吞氣で、樂天的で、心配、苦勞などと云ふものは、藥にしたくもないやうな顔をして居る。氣さくな男、面白い男として、遊興嗜好の場に重寶がられるのは是である。野心も少く、思慮分

別にも乏しく、輕はづみに、そつつかしいからして、愛嬌ある人物とは思はれるが、尊敬すべき人物としては取扱はれぬ。かう云ふ氣質の人に文學などの分らう筈がない。第一かう云ふ人は本を讀むと云ふことからして嫌なのだ。一時間も二時間も机に向つて居ることなどは出来ないのだ。従つて、人の溜息をついたり、涙を流したりする陰氣な談などと來ると、讀むでも薩張り面白くないのである。多血質の人は全然文學と縁がない。

粘液質の人とは、ネバ／＼した人の謂である。ハキ／＼しない人の謂である。身体などもどこが悪いと云ふとなしに、一体に不活潑で、動作が遅鈍で、しかも忍耐力だけは馬鹿にある。人に褒められても嬉しさうな顔をせず、けなされても怒らないで居るところ、大人物のやうだが、實はグツなのだ。かう云ふ人間は始終机にかちりついて居ながら、毎年落第する、落第しても一

向落膽しないで、やつぱりのろく／＼と牛の歩みをつゞけて行く。そして仕舞には及第するかも知れぬ。及第してもさう嬉しくは思はないであらう。かういふ人間に限つて、大學の門衛を三十年間勤続したり、區役所の小使を四十年皆勤したりする。馬鹿にしていゝのか、尊敬していゝのか分らない。兎に角、かう云ふ氣質の人に文學の好きな人は少い。文學者となる資格は勿論ないのである。

胆汁質の人は意志の強い、堅忍不拔の精神をもつた人である。感情はむしろ冷かで、時には残酷極まることを平氣でやつてのける。世間的の事業に於て大成功を収むる人は大抵是である。同時に大悪人も是である。此種の人も勿論文學者に適しない。

神経質。一名憂鬱性、又は苦勞性と云ふ。一帯に神経が過敏で、一寸した

ことでも氣になる。始終くよく／＼と物を思ひ案ずる方。多血質のやうに呑氣にしても居られず、粘液質のやうにねばり付いても居られず、さればとて胆汁質のやうな勇氣がない。かう云ふ氣質の人は、實世間に飛出して大活動をやるのには力足らず、人の下について碌々と日を送るには堪へられず、一般に不平家である、従つて厭世家である、而して文學者となるべき人は實に皆此氣質を具へて居るのである。

偕て、文學者たるべき精神上素質として、以上感情的なることと、神経質なることとを決定した。此二つの素質を外にして、更に、空想的なることと好奇心に富むと云ふこととを擧げたい、まづ空想的と云ふことから話して見よう。

空想的と云ふのは、つまり想像力に富むと云ふことである。事實として存

在しないものを、目のあたりあるやうに思ふ、換言すれば、架空の事を考へる、是が乃ち想像であつて、想像は誰しも有たないものは無いけれど、文學者は特に豊富なる想像を書く人でなければならぬのである。

同じく想像と云ふ言葉を用ひても、理論的に推量、推測して、どうもさうらしいと思ふのは、此場合謂ふところの想像でない。或は易者の言を信じて、吉凶禍福を豫め待ち設けるなど、是も此場合謂ふところの想像でない、例を取つて説明して見よう。今日ツンツルテンの書生さんが、末は博士か大臣になることを空想して居る、もしくは想像して居るとする。今の博士や大臣も昔我々と同じ書生さんであつたことと思へば、我々だつてなれないことはない。きつとなれる、なつた時は威張つてやらう、贅澤をしてやらうと、さう考へる丈けは、此場合謂ふところの空想、想像にならぬ。進むで、其大臣

博士になつた曉、自分が大學の講壇に立つた時の姿、其講義を聞いて居る學生の顔までが、鮮かなる幻影となつて現はれて來るとき、自分が立派な馬車に乗つて、都大路を走らせて居るところ、邸へ歸れば、數多き婢僕に、御前と云はれて、かしづかれて居るところを、目のあたりに見る時、其時の空想がほんとの空想である。其時の想像がほんとの想像である。かくの如く、實際になき光景を、鮮かに腦裏に描き出して、その架空の事の架空なるを忘れて仕舞ふと云ふやうなことが度々あれば、それが乃ち想像に富むと云ふのである。空想的と云ふのである。而して詩人文學者はかくの如き性質を有する人でなければならぬ。

大なる作家は、凡べて皆白日の夢に耽ける人である。其製作は所詮、夢の描寫に外ならぬ。人物の動作、光景の推移、ともに、作者が故らに之を導いた

のではない。人物は自らにして動き、光景は自らにして移つたのだ。作者はたゞ、男の笑ひ、女の泣くところを見て之を描き、鳥の歌ひ、雲の漂ふがまゝを寫すのだ。これでなくては、ほんとうの詩人作家とは云へないのだ。

空想は一般に、利益ある方面よりして之を見れば、大なる利益あるもので、貧書生が有望なる未來を空想して、現在の苦學を忍ぶとか、金の無いものが、若し百万圓の金があつたらば、どうして使はうの詮議から、つひ、ほんとうに、そう云ふ金持になつてるやうに、十分なり二十分なり、思込むで快を取るとか、さう云ふ點から見ればかり云ふのではない。空想像は、世間凡べての發明、發見、企業等の母である、或は産褥である。乃ちニュウトンもワットも、コロンブスも、スタンレーも、乃至はセシルロオズも、皆随分の空想家であつたのである。

だから、空想又は想像は、實世間の事業と云ふものを標準にして見ても、強ち排斥すべきものではないのだ。が、しかし、翻つてまた、其危険なる方面よりして見れば、なか／＼危険なものでもある。空想に耽つて、後に悔を殘すのは、吾人日常の生活に於ても幾度となく經驗を重ねるところ、更めて例を擧ぐるにも及ぶまい。

處世上の功過如何はともあれ、空想は文學者の生命である。少年時代などに少し位、文才があるとか何とか云はれたところで、そんな事位を頼みにしてはならぬ。空想の貧弱な人は、一寸筆先が器用であるにせよ、到底大なる文學者となることは出来ぬ。

文學者たるべき精神上素質として、最後に、好奇心に富むと云ふことを擧げる。好奇心とは其文字の示す如く、新奇なるものを喜ぶ心を云ふ。精しく

は、未だ會つて見たことのないものを見たい、聞いたことのないものを聞きたい、食べたことのないものを食べたいと云ふ念である、乃ち未だ會つて経験して見たことのない物を一度経験して見たいと云ふ慾望である。好奇心は人間誰しも有つて居る本能で好奇心のないものは人間でないと云つても差支ない。ひもじいから食ふ、寒いから着ると云ふのは生存上の必要である。もし此必要以外に慾求をもたないと云ふ人があつたならば、それはもう人間ではない。人間は、自分の食べる丈けのものを持ちながら、他人の食べてるものを、一口味つてて見たいと思ふ動物である。

ところで此好奇心に最も富むで居なければならぬものが、又文學者である。蓋し、文學は之を人生の批評と見るにしても、または世相の闡明と解するにしても、いづれも實世間に對する、廣く且つ深き觀察と經驗とに須たねば

ならぬ。ところで人生の經驗と觀察とは、勿論人各々の運命に支配せらるゝもので之をなすに便なる境遇に置かるゝ人と、不便なる地位に置かるゝ人とがある。此便不便は、何とも仕方のないことであるとして、同じ境遇地位に置かれた場合、最も深く且つ廣き觀察、經驗をなし得るものは、最も好奇心に富むた人でなければならぬ。何となれば、好奇心に富むた人は、自己の運命の許す限りに於て、成るべく多趣多様の經驗を積み觀察を積まうと努力するからである。乃ち文學者にとつては好奇心は非常に大切なものである。是があるが爲めに、常人の心付かぬ人情を穿ち、常人の目に映じない世態を描き出すことが出来るのである。

詩人文學者が如何に好奇心に富むで居るか、換言すれば、如何に新しき經驗を積むに忙しきかは、彼等が戀愛の歴史を見れば、最もよく説明されて居

る。彼等の戀は概して早い。「神曲」の作者ダンテは九歳にして夙くも、ピアトリスを戀したと云ふ。ダンテより早い人も澤山にあらう。是は何も彼等詩人文學者の性慾、生理上の衝動が、常人よりも早く發達したからだとばかりは解されぬ。是は寧ろ彼等の好奇心が普通の人よりも強いからなのである。初戀には限らぬ、ゲエテやバイロンなどの如く、艶福の詩人を以て稱せらるゝ人々の傳記を見るに、彼等が、かれが如く多くの婦人と關係したのは、必ずしも彼等の肉慾が烈しかつたからではない。新しき相手に、新しき戀愛を味つて見たかつた爲めだらうと思ふ。

之を要するに文學者は、好奇心に富むた人でなければならぬ。時には、此好奇心の爲めに、自分の生命財産はもとより、義理をも、人情をも犠牲にする位の人でなければならぬ。思切つたことを云ふやうだが、是ればつかりは文學史上の嚴たる事實であるからして、何とも致し様がない。

如上四様の素質——感情的であると云ふこと、神経質であると云ふこと、空想的であると云ふこと、並びに好奇心に富むと云ふことの外に、尙ほ詩人文學者たるべき先天的の資格と云ふものが、擧げて擧げられないことはあるまいけれど、兎に角其最も重要顯著なるものを擧ぐれば、即ち先づかくの如きものである。

這の四様の特質傾向は、全然孤立して存在する場合は寧ろ稀れで大抵は感情的なるもの、自らにして神経質たり、神経質なるもの、自らにして空想的たり、空想的なるものまた自らにして好奇心に富むと云ふのが常である。

第五章 文學者たるべき資格と天才

天才とは何ぞや——天才は藝術家にのみ限るべからず——天才と常人——程度の相違——種類の差別——文學上の天才とは如何なるものぞ——天才と常識——天才は必ずしも狂人に非ず——天才の尊重

天才と云ふ言葉は色々の場合に用ひられ、判然と一定したる意義はないやうであるが、まづ概して之を云へば、天賦の才能常人に傑れたる人物、大に傑れたる人物に名くるもの。文藝史の上より例證をとらば、ホメエルの如きダンテの如き、シエクスピアの如き、ゲーテ、シラア、バイロン等の如き、或は、レオナルドオ、ミケランゼロ、ラファエルの如き、また或はバッハ、ベエトオエン、ワグネルの如き即ちそれである。我が日本の文學史上に於て

も、紫式部や、西鶴や、近松などは天才である。明治の文壇に現はれたる人にも、故樋口一葉女史の如きは儘に天才であつた。高山樗牛氏の如きも同じく天才であつたらしい。

併しながら、天才は、僅に藝術家にのみ限つて云ふものではない。アレキサンダア大王や、シイザアや、シャアレマンや、ナポレオンや、ネルソンや、モルトケや、ビスマアクなどのやうな政治家軍人も天才である。ニュウトン、ワットや、ダアウインの如き發明家科學者も天才である。ソークラテス、プラトン、アリストオテレスの如き、カント、ヘゲルの如き、またレヨオペンハウエル、ニイチエの如き哲人、思想家は、より大なる天才である。基督、釋迦の如き神人に至つては、更により大なる、若しくは最も大なる天才である。

儲て、天才の士は常人に傑れたる天賦の才能を有するものとして、其天賦の才能は、人間能力の全體に就いて云ふものでないのは勿論である。何人がよく人生萬般の活動に於て悉くよく天才たり得るものぞ。ゲーテの如き、レオナルドオの如き、随分多藝多能の人であつたとは云ふけれど、しかも未だ、あらゆる方面の事業に於いて成功すべき資質を有して居たのでは恐らくあるまい。所詮天才者は、其特殊の方面に於てのみ、凡庸人に卓越して居るのだ。

然らば、彼等天才なるもの、其特殊の方面に於て凡庸人に卓越する爲めに、爾餘の方面に於て凡庸人に劣らずに居られるか、どうか。是に就いては兩様の見解がある。一方は、人間の能力には全體として見て、一定の分量があるから、ある特殊の方面に於て、傑出する爲めには、爾餘の方面に於て、必ず

多少の缺陷を作らずには居られないと、かう云ふ考。また一方は、人間の能力には、全體として見て一定の分量と云ふものがない。或る人は多く、ある人は少い。天才は常人に比して能力全體の分量が多いのであるから、或る特殊の方面に於て、常人に卓越することありとしても、それが爲めに、必ずしも、爾餘の方面に缺陷を作る必要はないと、かう云ふ考である。自分は後者の見解を取る。理屈はともあれ、我が文壇の三文文士などが、大才ゲエテ、シラアなどと、同一分量の人間能力を有つてるとは、信じようとしても信じられないのである。

斯くの如く、人間能力の總分量を同一でないと見たところで、尙ほ今一つの疑問が生ずる。天才と常人とは、單に分量上の、もしくは程度の上の相違であらうか、或は種類の上の差別であらうかと云ふ、即ち是である。程度の

上の相違と見るのは、大男と小男との相違である。種類の上の差別と見るのは、男と女との差別である。で、世間一般には、程度の上の相違として考へられて居るらしいが、所謂天才と稱せらるゝ人自らは、大抵種類の差別として考へて居る。換言すれば、常人は天才をも自分達と同一種族に屬するものと考ふれど、天才者自らは、華族が士族に對するやうに、士族が平民に對するやうに、どつか、ちがつた血が脈管を通じて居る、かの如く思ふのだ。——讀者諸君は、どう思ひますが。僕は實際天才でないかは知りませんが、此場合天才の人が考へるやうに考へたい。

天才なるものゝ一般的説明は、まづそれ位にして置いて、次ぎには、文學上の天才と云ふものに就き、少しくお話して見ませう。

文學上の天才とは抑も如何なるものぞ。一言にして答ふれば、前掲文學者

たるべき素質に於て、特に常人に卓越せるもの即ち是である。精しくは異常なる程度に於て感情的たり、神経質たり、空想的たり、また好奇心に富みたる人物である。斯くの如き傾向を有つて生れた人が、生れて後また適當の境遇に置かれ、適當の教育を施さるれば、則ちそれが大文豪である、大詩人である。

天才は勿論、是等の諸傾向を有すると同時に、常人が有する丈けの理性なり、意志なりを具へて居る。若し常識と云ふ言葉が、常人の有すべき意識上能力を現はすものならば、天才は決して常識の缺けて居るものではない。がたゞ右に述べたる如き素質に於て、殊に卓越傑出して居る爲めに、どうしても其言行が常人のそれと同じやうには行きかねる。乃ち悪く云へば、常规を逸し、善く云へば、天馬空を行く。常规を逸するは、常識がない爲めな

く、常識の外に、常識以上のものが加はつて居るからである。翼ありと雖、天馬固より地を歩き難いのではない。空をも行き得ると云ふのである。

然るに、一部のそつつかしい論者は、此事理を解せず、前既に述べたやうに天才はこの天才的素質ある爲めに、他の能力に缺陷あり、換言すれば、常識に不足するを免れざるものと考へ、天才は即ち狂氣なりと云ふやうな斷定を下すに至つた。

彼等が此斷定を下すに際しては、獨逸學者の所謂、詩的狂熱なるものと、二三名なる文學者の偶々發狂せる事實とに、一應尤もらしい理由を見出した。其理由たるや、一應尤らしい理由ではあるが、あかし、實際の論據とするには足りないものだ。

詩的狂熱とは、天才が神來の感興に捕へられ、或は感情の波高く、空想の

夢滋くして、理性の光輝を没し去り、或は神経の刃鋭く、好奇の鉄剛くして意志の盾に防ぎかぬる時の状態を云ふ。平たく云へば、ミュウズ神の殿堂に參籠して、一切を此神に打まかせたる、前後不覺の境地を云ふのである。かくの如き状態にあつて、かくの如き境遇に於て、天才の言ふところ行ふところ、所謂常識なき人のするところに類すべきは、想見するに難くない。どうも是は正氣の沙汰とは思へぬと云ふやうなことがあるに違ひない。しかしながら、是を以ての故に天才、特に文藝上の天才を狂人と同一視するのは無法である。一事に熱中したるとき、他を忘るるは、詩文の人に限られたる特色ではない。爾餘の社會に於ても、非凡の人物即ち天才は、大抵皆かくの如き熱中の發作をもつて居る。政治家でもさうである。軍人でもさうである。實業家でもさうである。學者、宗教家などに至つては殊にさうである。熱中狂奔

と云ふ點よりして、詩文の天才のみを狂人扱ひしようとは、無法極まる話である。

有名なる詩人文學者に偶々二三の發狂者があつたからと云つて、直ちにそれを天才と狂人との同一なる所以の理由とするのも無法な話である。狂人は凡人にもある。天才にのみ限つたことではない。ましてや、詩文の天才にのみ限つたわけのものでは無いのである。よし、假りに一步を譲つて、天才も特に詩文の天才に、とり分け狂人が多いとしたところで、それでもまだ、天才を狂人と同一視するの理由にはならぬ。蓋し、天才は其本來の傾向として、特に感情的であり、神経質であり、空想的であり、もしくは好奇心に富むで居るところから、若し何等かの動機により、他の精神上能力を損傷せらるゝ場合には、甚だ容易に意識の平衡を失ふ。即ち發狂し易いのである。從

つて天才者に狂人多しと云ふ事實をも來すのであらう。だから、天才と狂人との間に密接なる關係の存することは、必ずしも謂はれなくもあるまいが、是を以ての故に、天才は即ち狂人なりと斷するのは、速斷に過ぎるかと思ふ。

最も天才が狂人だとか、狂人でないとか云ふ議論は、狂人其物の定義次第で、どちらにでも理屈はつけられるものであるから、何もさう眞赤になつて天才の狂人ならざる所以を辯ずるにも當るまいと、考へる人もあるかは知らぬが、元來この天才を狂人なりと云ふ論者の多數は、甚しく、天才なるものに對する敬意を缺いて居る。彼等が天才を一種の狂人なりと云ふは、畢竟天才に對する終極の評價なのである。天才に對する侮辱なのである。是が自分の癢に障る所だ。

天才は固より何れの方面にあつても尊敬すべきものであるが、文學美術の天才に於ては、特に尙ばなければならぬ。蓋し文藝以外の事業と云ふものは大抵皆、個人の努力よりも團體の協同に須つことが多い。従つて天才なるものの腕を揮ふ餘地が比較的に少い。而してかくの如き事情は、社會制度が複雑になつて來れば來るほど、いよゝ益々切迫して行く。ところが、文藝はさうでない。其事業は主として藝術家の個人的活動に基き、協力一致と云ふことが、格別の利益を來さぬ。乃ち凡物共が何百人、何千人寄つたとて、天才一人の事業を爲し得ない場合がいくらもある。文藝は實に天才者の貢獻によつて保持せらるゝものである。だから文學美術の上に於ては、特に天才を尙ばなければならぬのである。

第六章 文學者たるべき資格と男女兩性

男女兩性の得失長短——婦人固より文學者たることを得——文學史上の實例——二者何れがより多く文學者たるに適するか——婦人は男子よりも感情的也——婦人はまた男子よりも神經質也——男子は婦人よりも空想に富む——男子はまた婦人よりも好奇心に富む——婦人に適する文學——叙情詩——具體的説明——除外例

男女兩性は種々なる方面に於て、其長短を異にする。男子に適するもの、必ずしも女子に適せず。女の得意とするところのもの、必ずしも男子の得意とするところでない。

生れてから後の境遇とか修養とかを抜きにして、單に先天的の素質のみに

就いて見るも、男子と婦人とは其長所短所を殊にして居るものが甚だ多い。よしまた其長所を全然異にせざる場合にも、尙ほ程度の差あることは免れぬ。

然らば則ち、前に述べたる文學者たるべき先天的素質と、男女兩性との關係は如何。此問題はまづ二つに分れる。男女兩性の中何れかは、文學者たるに適しないものではないか、是が第一である。双方とも文學者たるに適しないことはないとしたところで、其何れが、より多く適して居るか、是が第二である。

第一の問題は、一見ただ形式上の問題たるに過ぎざることを知る。何となれば、文學史上の嚴然たる事實として、婦人の文學者たる者が幾人もあるからである。しかも、サツファオオの如き、ジェエン・オースチン、シャアロット

ブロンテ、エリザベス、ギヤスケル、ジョージ・エリオットの如き、ジョージ・ソンの如き、また我が紫式部、清少納言の如き、近くは故樋口一葉女史、~~あまのこ~~の如き、有聲男子をして後へに墮若たらしむるやうな大詩人大文學者を婦人の間から出して居るのである。婦人もまた文學者詩人たるべき資格あるは、議論を待たずして已に明白なる事實であると思ふ。

第二の、男子と女子とは、どちらがより多く文學者たるに適して居るか、是は儘に一應の研究を要する問題である。

此問題を解決するには、上來屢々掲げたる文學者たるべき先天的素質を双方の場合に就いて吟味するのが、最も便利なる方法であらう。尤も、實際に男女が文學者として立たうとする場合には、先天的の素質ばかりでは足らず、後天的要素、即ち其人の境遇とか教育とか種々なる事情が影響するもの

であるからして、實際問題として今文學者となるのに男女何れが、より多くの便宜を有するかと云ふことならば、自らまた別様の見地に立つて觀察する必要もあらう。が、茲には單に素質の如何をのみ論ずるのであるから、修養條件とか、生活状態とか云ふやうな、後天的要素一切を抜きにして説くものと思つて戴きたい。

偕て、文學者たるべき先天的素質の主要なるもの——感情的なること——神經質なること、——空想に富めること——好奇心に富めること——は、男女各々の場合に於て如何なる關係を有するか。

まづ感情的と云ふことから吟味して見よう。一般に、女子は感情の動物であると云ひ、また、感情は女子の生命であるとも云ふ。一寸した事にも、『オ、嬉しい』と叫び、『こんな情ない思ひをしたことはありません』と泣く。

いのは女の誇りで、また唯一の武器である。女賢しうして牛を賣り損ふとやら、智慮分別は女のものでない。心弱きを女々しいと云へば、意志の力も劣つて居る。所詮、女は感情的である。

次に、神經質と云ふ點はどうかと云ふに、曩に已に述べたる如く、之はくよくくと物を案ずる、所謂苦勞性の義である。ところで、かう云ふ人物は女には勿論男子にも無いことはない。が、男子に斯る性質の人があれば、彼は女性的の人物であると云はれるところを以て見ても、一般に女子の男子よりも、より多く神經質なることは分るであらう。

其次ぎには空想的と云ふこと。總じて婦人は目前の事物に對して、最も多くの興味を有するものである。換言すれば男子よりも、より多く現實的に出來て居るのである。婦人は、男子が一年二年三年後のことを考へて居る間に、

其日一日のこと、其晩一晚のことを思ひ煩つて居る。——今假りに、相應な財産を以て樂に暮して居た人が、或る不慮の災難かなんぞで、すつかりすつて了つたとする。着て居る着物をも脱がされる、その刹那の痛を感ずることは、女が男よりも烈しからうけれど、二日と経ち三日と過ぎ行く中に、女は早くも其新しい境遇になれ、今晚中に縫上げなければならぬ小供の着物とか翌朝のおみをつけのことをばかり考へて居る。過ぎ去つた苦痛を呼び返へすことをもせず、來るべき仕合せを迎ふることをもせず、唯だ現在の願ひに煩はされてばかり居る。男は之に反して、過去の一年に切齒扼腕し、家運の挽回を二年の後、三年の後、五年、十年、二十年の後に期して居る。そして、口やかましい細君から、米櫃はもう空ですよと、吐鳴られる。何年、何十年さきのことやら、自分が大臣になつた時の光景を、白晝の夢に書いて居る男と、

新しく撮つた丸鬚姿の寫眞を親しいお友達から送られて、嗚呼自分ひとり殘されて仕舞つたのかと、今更のやうに心細がつて居る女とを比較して見るがよい。同じく是れ、机にもたれて、頬杖をついて居るのである。

女はつゝ、まじやかに地をすつて行き、男は股を開いて濶歩する。男の足は高く飛ぶことあれど、女の足は竟に地を離ることなし。空想はどうしても、男子が女子にまさつて居る。

雨のふる晩、風の吹く夜、床に入つてから、色々なことを、それから、それへと考へ出して、ねるにねられないと云ふのは、固より女にもあることだ。恐くは男よりも多からう。けれども、女の眠られないのは、物が苦になるからである、案じられるからである。主として神経質なからである。空想に豊かな爲めではない。夜がふけ、あたりが森閑とするにつれ、日中の忙しさに

疊むで置いた空想の翼を再び擴げ、過去に飛び、將來に翔むで、悲しき嬉しき、さまざまの光景をまのあたりに描き出すと云ふのは、どうしても男に多い。乃ち女は、胸に思ひわづらふことがあればねつかれぬ。男は現に見る幻をそのまま携へて、まぶたを閉づることが出来るのである。——男子は女子よりも空想に富むで居るのだ。

最後に、好奇心に富むと云ふこと、是もやつぱり男子が女子に勝つて居るかと思ふ。蓋し、男心と秋の空と云ふ言葉もある通り、男の心は誠に變り易いものであるが、心の變り易いのは、つまり新奇なものを喜ぶのだ、乃ち好奇心なのだ。女子は男子ほどに飽きつぽくない。むしろいつまでも一つのものに執着するのが其性である。乃ち好奇心が少いのだ。

或る事業を思立つなどと云ふことも、男子は主として其好奇心が動機にな

る。どんなものか知らと云ふ氣でやり度くなるのだ。ところが、婦人はさうでない。何かの事情がやらずに居られないからやるのだ。もしくは、明かに其結果を打算した上でやりたくなつたのだ。男子が好奇心で思立つことを、女子は必要、所謂必要がなければ思立たないのである。戀愛なども、男子のは十中八九、好奇心の發動である。女子のは、性慾か、然らずむば利害の打算に基いて居る。殊に戀愛に伴ふ罪惡、例へば姦通などの如きも、男子の方は多く醉興からである。——好奇心はどうしても女子より男子の方がまさつて居る。

以上述べ來りたる如く、感情的たり、神經質たる點に於て、男子は女子に劣り、空想と好奇心とに富むことに於ては、女子よりも男子が一步を超えて居る。ところで、此四つの素質は、詩人文學者になかるべからざる大切のもの

なれば、かやうに男女の性情を分析解剖したればとて、之を以て直ちに、どちらかより多く詩人文學者たるに適するとも斷じかねる。之を斷ずる爲めには、是等の素質其物の價值に等級をつけるか、または、男子が空想、好奇心の方面に於て卓越せる程度と、女子が感情的、神經質と云ふことに於て傑出せる程度とを、比較商量するかをなげれば不可能である。

で、或る人は是等の素質其物に文學上價值の等級をつけて、感情的、神經質と云ふことは、空想に富むよりも、好奇心に富むよりも大切なりとし、其結論としては、女子が男子よりも、より多く文學者たるに適する。男子は宜しく、文學者としての地位を、女子に譲つて了ふがいと云ふやうな議論をする。

又、ある人は空想並びに好奇心に富むと云ふことを、感情的、神經質と云

ふことよりも、より多く文學上價值あるものと見做して、勿論、男子は女子よりも、文學者たるに適して居るとかう結論する。

かくの如く、感情的、神經質と云ふことと、空想並びに好奇心に富むと云ふこととの間に價值の等級をつけて仕舞へば格別、もし之をなすことが出来なければ、換言すれば、四者何れを重しとし、何れを輕しとすることも出来ぬものとするれば、勢ひ止むを得ず、前に云つた、男子が空想好奇心の方面に於て卓越せる程度と、女子が感情的神經質なることに於いて傑出せる程度とを比較商量するより外はないやうになる。ところが、是は餘りに立入つた穿鑿であつて、一朝一夕に何れがどうとも決定されない。他日また機を得て精論することと致しませう。

それで、次ぎには、少しく是迄と見方をかへ、男子は如何なる種類の文學

に適するか、女子は如何なる種類の文學に適するかと云ふ問題を研究して見よう。

抑も感情的なる詩人、神経質なる文學者の手に成る作物は、如何なるものであるかと云ふに、それは普通に所謂叙情詩なるものである。少くとも叙情詩的のものである。また専ら空想的にして且つ好奇心に富める作家の筆になれるものは何かと云ふに、それは普通に所謂叙事詩なるものである、少くとも前者の叙情詩的なるに對して叙事詩的のものである。

それは其筈だ。叙情詩とは、作者自身の心持感情をそのままに、美しい調子をつけて發表するもので、空想の力などは全然不用でないまでも、極々小範圍に限られたもので間に合ふし、また格別の觀察や經驗もいらぬから従つて好奇心の刺激に須つことも甚だ少い。即ち、唯だ美しい感情、強烈なる

感情さへあれば澤山だ。又唯だ、鋭敏、細緻なる神経さへあれば充分だ。立派な叙情詩を作り出す上に、一向差支がないのである。

然るに、叙事詩は、作家の主観、即ち作家自身の心持や感情を發表するよりも、寧ろそれ以外の客觀的事象を描出するもの、換言すれば自己一身の外なる人間や自然を寫さうとするもの、結構がいり、脚色がいる。之を作るもの全然感情的なるところを缺き、神経質なるところを有しないで居るわけに行かないのは勿論ながら、しかも此場合主として要求せらるるものは空想のはたらきである、また好奇心の刺激である。此二つの者あつて始めて種々なる性格と境遇とを生み、種々なる觀察描寫の機會を作るのである。

之に依つて之を見れば、感情的たり、神経質たるところに於て、最も傑れたる婦人が、叙事詩的なるものよりも叙情詩的なるものに適し、空想に富み、

好奇心に富むところに於て、最も秀でたる男子が、叙情詩的なものよりも、寧ろ叙事詩的なものに適して居るのは無理もない。

之を更に、通俗的に敷衍して云つて見やう。從來我が日本で詩と云へば、支那傳來の漢詩なるものを外にして、俳句と和歌とが重なるものである。而して是等は一般に、叙事詩的なもの少くして、叙情詩的なものが多い。中にも和歌即ち三十一字詩は、俳句即ち十七字詩よりも、より多く叙情詩的であるやうに思ふ。で、その一般に叙情詩的な俳句和歌は、婦人に適しないものではないのであるが、其中でもとりわけ和歌は婦人に適した文學であると思ふ。俳句よりも和歌の方がより多く向いて居るやうに思ふのである。

此從來の十七字詩三十一字詩を外にして、近頃では新體詩と云ふものが行はれて居る。之は主として西洋の韻文を模倣したものである。従つて叙情叙

事何れの方面にも進むで行くことが出来ないのではないけれど、しかし今日迄の經過に就いて云へば、まだどうも叙事詩らしい叙事詩は見當らぬ。之れは常に詩人の技倆が至らない爲めか、換言すれば、才ある詩人が出ない爲めか。それとも、我が日本語の性質上、叙事詩、特に長篇の叙事詩を作るのは不便なる事情があるからであるか。もし前者ならば、天才ある人が出さへすれば文句はない話であるが、もしまた後者ならば、止むを得ない、當分の中叙事詩の大成を斷念しなければならぬ。今後しばらくの間、長詩は主として叙情の方面に向つて力を致さなければならぬ。従つて、長詩もまた閨秀文學者の分野となるわけである。

ところで、婦人が叙情詩もしくは叙情詩的なものに適すと前に云つたのは、嚴密に叙情詩ならざるも、尙ほ其内容が叙情詩と同様なるものは、矢張

り、製作の基礎を、主として感情的、神経質なる作家の主観に置くからである。

叙情詩的なるものは、其形式叙情詩なるも、また或は韻文ならざるも、婦人の製作に適し、鑑賞に適する。而して散文の叙情詩的なるものは、所謂美文である。美文は婦人に適する文學である。

叙事詩的と云へば、純然たる叙事詩を外にして、小説戯曲の類をも含む。而して一般に男子が婦人よりもより多く小説戯曲の類を、製作し鑑賞するに適して居る。

偕て、斯くの如く、男女両性の各適するところを決定することはしたなれど、之は勿論、男女全體の傾向に就いて云つたもので、個々の場合をとつて云へば、反對に、男子にして叙情詩的なるものに向き、婦人にして叙事詩の

ものに向いてるものもある。乃ち例外はある。が、まかし、例外はやつぱり例外である。右の原則を動かすに足らないのだ。

かの天才なるものは、千人万人に傑出卓越せしもので、従つて人間世界に於ける一種の例外と見ることが出来る。常人の範疇を以て之を律することは出来ない場合がある。で、かくの如く人間世界に於て一つの除外例を作る位の人ならば、其人が人間界に於ける男女両性間の差別を超越することのあるのは怪むに足らぬ。乃ち天才ある詩人は男子にして感情的、神経質なるところに、専ら卓越することあるも不思議でない。婦人にして専ら空想にとみ、好奇心に富むことあるも驚くべきでない。従つて婦人にして大小説家たり、大戯曲家たるものもあるも、男子にして大叙情詩人たるものもあるも、一向驚くに足らず、不思議とするに及ばぬ。是れ唯だ例外である。

文學史上 有名なる事實に徴するも、バイロンや、セリイや、キイツや、ロゼツチや、スキンバアンや、男子にして而かも立派なる叙情詩人である。ジエエン・オオスチンや、ジョオジ・エリオットや、婦人にして而かも堂々たる小説家である。けれども彼等は非凡の人であつた。通則として婦人が叙情詩的なるものに適し、男子が叙事詩的なるものに適するの事實は、竟に動かし難いのである。

それに例外は非凡の人でなくともあることだ。男子にして女らしい人、女子にして男らしい人は、いくらもある。我が今日の文壇などに於ても、だいぶかう云ふ例外がある。此例外あるが故に、上述の原則を無視する必要はないと、念の爲め今一度繰返して置く。

右の如き次第であるからして、餘り適切な忠告でもないけれど、讀者諸君

の中男子の方は、まづ一般に叙事詩的な文學に向つて御進みなるが得策であらうと思ふ。また御婦人の方は、まづ一般に叙情詩的の文學に向つて御進みになるが便利であらうと考へる。それに、よし將來は小説を以て立ち脚本を以て立たうと云ふ人でも、叙情的の手腕がなければ、到底立派な物は出来ないと云ふ、一面の理由もあるからして、兎に角最初は、韻文、美文の方面からお這入りになつて、決して御損はなからうと信ずる。

第七章 文學者と修養

素質と修養——天才——修養の第一は讀書也——文學者と學者——修養の第二は經驗也——苦勞人——修養の第三は試作也

人は誰でも文學者になれると云ふわけのものでない、文學者になるには文學者になる丈けの資格がある、其資格の一として、まづ生れながらに有しなければならぬ性質素質に就いて是まで述べて來たのであるが、あかし、文學者になる爲めには、それ丈けの條件では不足である。單に先天の素質があると云ふばかりでは駄目である。

生れ付き文學者となるに適した人は世間必ずしも少くはない。それが立派な文學者にならずに仕舞ふのは、自ら此方面に進まうと志さないからでもあ

らう或は進まうと志しても、種々なる事情の爲めに、専心之に従ふことが出來ないからでもあらう。が、其大部分は文學者になるつもりで居ながら、之に必要な修養をしないから、物にならないのだ。

修養は文學者たるべき第二の要件なのである。

前にも已に述べたる通り、天才は誠に尙ぶべき者である、とり分け文學に於ては尙ぶべきものである。しかし、いかに天才があると云つてもそれに修養を加へなければ役に立たぬ。ところが、殘念なことに、所謂天才肌の人と云ふものは、多く怠け者だ。強ち、自分は天才があるのだから、凡人と同じやうに、コッく勉強する必要はないと云ふ、さう云つた自惚うはれからばかり怠けるのではないが、兎角才氣のある人は無精である、も少し精を出さなければいけないと思ひながらも、つい遊び度くなれば遊ぶで仕舞ふ。之は甚だ殘

念なことである。また本來怠け者でないにしても、天才ある人は、どう云ふものか一體に不遇である、不運である。或は貧困の爲め、或は病氣の爲めに勉強したくてもすることが出来ず、あたら可惜偉器を抱いて村閭巷塵の裡に埋没されて了ふ。もしくは、其天分を發揮するに及ばずして、夭折して了ふ。乃ち才子薄命と云ふやつだ。世の青年子弟を教育し監督するの任に當れる人は勿論、其他の人と雖、もし天才の尙ふべきを知らば、特に天才あるものを誘導し、鞭撻する上に意を留めて貰ひたい。また更に、出来る限りの保護を與へて貰ひたいものである。

文學者となる爲めに必要な修養は、まづ第一に讀書である。人は如何なる事業に従ふにもせよ、一通りの教育を受けなければならぬことは勿論だが、文學者になる人は、普通の學校教育などに於いて行はるゝ讀書位では到底

用をなさぬ。もとより文學者は其文字の示すところによると、哲學者、科學者などと同じく、一種の學者のやうに思はれるかも知らぬが、文學者は決して學者ではない。學問は主として智力の作用に依頼し、文學は専ら感情の作用に依頼する。従つて文學者は所謂學者ではないのである。だから、如何に讀書が大切なからと云つて、學者同様に讀書の人となる必要はない。學者同様にとは學者ほど澤山に、廣く讀む必要はないと云ふのだ。或は學者が讀むやうな讀み方で讀む必要はないと云ふのだ。學者は其専門學もしくは其研究題目と關係ある限り、あらゆる方面に亘つて、参考の書類を涉獵しなければならぬ。此際自家の好むところに従つて、一方に僻することを許されぬ。また同じものを讀むにしても、一定の秩序を立て、讀み、系統ある智識を收獲するやうに心掛けねばならないのだ。ところが文學者の場合はさうでない。

一定の秩序を立て、讀む必要もなければ、自らの好むところに従つて讀書材料を選択しても差支ない。如何に不朽の大作なればとて、讀みたくなものは讀まなくともいふ。何を讀むにも、一々理屈をこねながら讀む必要もない。文學者の讀書は、自家の趣味性を發達せしむる爲めである。世態人情に通ずる爲めである。また實に創作の刺激を其中に見出さむが爲めである。

古來の有名なる文人を見るに、いつれも皆一廉の讀書家ではあるが、しかし所謂學者肌の人ではない。セクスピアなども随分色々なことを知つても居るやうだが、しかし學者としては餘りエラクなかつたらしい。拉典語なども殆んど出来なかつたと云ふし、古代文學を活用して居るのなぞも、多くは口耳三寸の學であつたらうと思はれる。ゲエテも色彩の研究解剖學等に新發見をして居るなどと云ふと、如何にも學者らしく聞えるが、しかし單に學者と

して丈けならば、不朽の天才とは見られない。シラアも學問の上では、甘じして哲學者カントの後塵を拜して居たところを以て見れば、學者として、獨逸民族の光榮とまでは云はれまい。我が國の文學者でも、西鶴や、近松や、其著作を讀むで見れば、非常な博學であつたらしく思はれるけれども、漢文の本でも持つて行つて講義をさせたなら、案外平凡な字句の解釋などに苦むたかも知れぬ。現に西鶴の如きは、源氏物語一卷を通讀したことがないときへ云はれて居る。そこへ行くと、馬琴は近松や、西鶴に比べて、餘程學者らしいところがあるが、學者らしい丈けそれ丈け文學者として前きの二人に劣つて居る。

明治の文壇に於ても、今現存の作家に對しては、聊か憚るところがあるから云はぬとして、故人齋藤綠雨氏の如き、自分でも公言して居た通り、餘り

廣くは讀書しなかつた。之もやつぱり源氏物語を讀むたことがない方の組だと云はれて居る。また樋口一葉女史の如きも、天死せられた割合には、色々な本を讀まれたらしいけれど、しかし、國歌國文の講義でもさせたらば、女史よりもずつと平凡な、ずつと下らない學校の先生などが、うまかつたであらうとさへ思はれる。

かう云ふと、文學者に讀書が大切だと云ふ最初の説に矛盾するやうに聞えるかも知らぬが、之は唯だ、文學者の讀書は學者の讀書と同じでない、文學者は學者ほど行き渡つて讀む必要はない、學者のやうな讀み方をするに及ばないと、さう云ふ考なのである。

讀書に次いで大切なのは所謂經驗なるものである。

文學と云ふものを如何様に定義するにもせよ、此人生、生活と云ふものを

離れて之を考へることは出來ない。小説や戯曲の如き、客觀的の描寫を土臺とするものは無論のこと、韻文美文の如き、作家自からの心持なり、感じなりを、直接に發表する作品に於いても、其作品が反映するところのものは、同じく是れ人生の活動である。人生の刺激である。種々なるものが錯綜せる人生の戦場に、勝つては凱旋の叫びを擧げ、敗れては絶望の呻きを漏らす、是からして美文も生れ、韻文も生れるのである。明確なる觀察となつて現はれないまでも、精緻なる描寫となつて見えないまでも、潑刺たる人生の俤は、作家の人格其物を傳はつて、美文にも、韻文にも流れ込まずには居られないのである。即ち人生を離れて文學は存立するものでない。大なる文學ほど、人生に對する交渉が多い。文學者は勢ひ、世態人情に通じた人でなければならぬ。所謂苦勞人でなくてはいけないのである。

ところで世態人情に通ずる爲めにはどうしたらはいゝか。苦勞人とは果して如何なるものか。學問をする丈けではない、書齋にばかり坐つてゐることではない、書物の蟲になつてゐることではない。自分で實地の經驗を積むことだ。戀愛もし、放蕩もし、貧乏もし、墮落もして見ることだ。とくに成功よりは失敗、安樂よりも困難と、成るべく人生の暗黒なる方面に這入つて見なければ駄目だ。苦しい人生を見て來なければ駄目だ。誰かの言葉に、『涙を以てパンを割いた人でなければ、人生も藝術も共に談るに足らない』と云つた、即ちそれなのである。

修養の第三として擧ぐべきは、試作である。製作の實習、即ち筆ならしである。

以上讀書と、經驗と、並びに試作と、是が、人の文學者となる爲めに最も

必要なる修養である。次ぎの章からして此一々に就いて今少し精しく細なる説明をして見ようと思ふ。

第八章 讀書の材料及び方法

如何なる種類のものを讀むべきか——不朽の大
 作——讀むときの心得——必ずしも精讀するの必
 要なし——會心の文字——音讀と聲調の美——拔萃
 ——國文學に於ける名著——維新前——維新後——漢
 文學——西洋文學——外國語の勉強——英文學——大
 陸文學——新刊物——文學以外の讀書——圖書館及
 び貸本屋

讀書の大切なることは已に述べた。また、學者流儀に讀書するの必要な
 ことをも已に云つた。

よからば、將來文學者たらしむとする人々は、如何なるものを、如何やうに
 して讀むのであるか、此事に就いて少しくお話して見よう。自分の趣味の導
 くまゝに、何でもかでも讀むと云ふやり方、之れも強ち悪いことはないのだ

が、よかしく、成るべくは、少數の傑出したる作物を選擇して讀む方が、時間
 の經濟にもなり、また、妙な悪趣味に化せらるゝ危険もなく、つまり便利
 であらうかと思ふ。

何れにしても、不朽の大作と云ふやうなものは、是非一邊讀むで置く方が
 いゝ。もつとも此不朽の大作と云ふ様なものは、自國の文學にしても時代が
 だいぶ隔つて居たりなんかして一寸讀みづらい場合、また外國の文學ならば
 語學の素養と云ふやうなことは抜きにしても、其作物の歴史に通せず、其背
 景になつて居る文化を知らなかつたりして、兎角、それほどの興味を感じら
 れない場合など、つひ讀みかけて見ても途中でやめるやうなことになるもの
 だが、しかし、是は多少の我慢をして置くに限る。殊に古今の名著など、云
 ふものは、青年時代、少年時代に於いて一遍讀むで置けば、其受けた印象が

いつまでも残つて、爲めになることが非常に多い。之に反して、さう云ふ名高いものは、若い時に読みはづして居ると云ふと、後日になつてつひ讀む折がなくなるものだ。

偕て次ぎには讀書の仕方だが、前にも述べた通り、一定の秩序を立て、讀み、系統ある智識を收獲しようと思ふのではないから、従つてまた、どんな物でも一々精讀しなければならぬと思ふことはない。餘つぼとの大作でも、それほど面白味を感じない場合には、ズット一通り目を通して置きさへすればいい。が、もし、讀むで行く中、どつか胸奥の琴線に觸れる者があるやうに思ふとき、其時には、繰返しまだ繰返して精讀玩味するがいい。

極めて些細な注意ではあるが、本を讀み行く際、面白いと思つたところに、それが一字一句でも、一行、一節でも、乃至はその一段落でも、何か色

鉛筆で^{しるし}も標をつけて置くことだ。後で再びそれを取り出して見なくとも、只だその棒を引くなり、圈點を打つなりした丈で、其時の印象を長く残すことが出来るやうに、自分などは思つて居る。

それからまた音讀である。聲を立て、讀めば、文章の調子、即ち聲調の美と云ふものがよく解るし、また其文句を暗誦する上にも大變都合がよい、昔の人は盛に音讀をしたもので、其爲めか、教育などあまり無い人の書いた文章でも、どつか調子の整つたところがあつて讀み心地がよい。ところが、今日の學校教育を受けた人は、我々はじめ餘り音讀と云ふことをやらなかつたせい、骨折つて書いたものも調子が出て來ぬ。誠にゴツ／＼として居て、耳觸りの悪いことと云つたらない。音讀は全く必要なものだ。殊に美文や、韻文のやうな、聲調の美と云ふことに専ら重きを置くものにあつては、默讀

では殆んど駄目である。讀むだが讀むだにならないのである。

讀書に際して、もう一つ心掛くべきは書抜きをすることである。何か別に帳面のやうな物を作つて、面白いと思ふところを、長し短しに係はらず、書き抜いて置く。かうして置けば、後で暇なとき取り出して讀むで見ると、書も面白いし、また、直接作文の資料ともなる。尙ほ餘裕があつたらば、それ等の書抜きした文句を、春夏秋冬の季節に区分し、叙事叙情に配當したりして、字書や索引の體裁を具へさせて置くのも、結構な思付きであらうと思ふ。

以上は讀書に關する大體の注意をお話したのであるが、以下更に國文學、漢文學、西洋文學と方面を分つて、精しく其讀むべき材料と方法とを述べようと思ふ。

先づ最初には國文學から。

文學者にならうといふ人が、自國の文學を知らなければならぬのは、寧ろ明白に過ぎたる道理であらう。國文の素養なくして文學者にならうと云ふのは、代を拂はずに物を買はうと云ふよりも、より無法なる考である。何をさし置いても、まづ讀なければならぬものは、國文學の有名なる述作であるのだ。

◎保元物語 (博文館、日本文學全集第十九編)

鎌倉時代文學の特色たる軍記物、もしくは戦記物語の先驅(大シ)に掲げる平治物語と共にである。保元の亂の顛末を記したもので、八郎爲朝に關する記事などは、随分剛快な趣味に富むで居る。

◎平治物語 (同上)

平治の亂を記したるもの。剛壯と云ふ味は保元物語よりも稍や少いと云はれて居るけれど、さすがに「光頼卿參内」の條など、さびしくした氣持の好い書きかたで、又「義朝敗北」の條、鎌田政家が涙ながらに姫君を手にかけるところ、さては「常磐落つる事」の條などは、讀むで思はず、ほろりとされる。以上二書、共に作者不明。

◎平家物語 (同上第七編)

一門の榮華二十年、バツと花火のやうに満天に輝き渡つたのも一瞬の間で、忽ち夢のやうに消え去つた、平家盛衰の歴史こそ世に希らしき好詩料、之を情趣タップリな艶氣の多い筆致で叙したるもの、即ち此平家物語である、殊には琵琶法師が琵琶に合せて語つたものだけに、其聲調極めてなだらかで、さながらの韻文である。故高山樗牛が此書を愛誦したのは人のよく知

るところ、彼れの文に一種聲調の美があつて、何とはなしに人を引付けるやうであつたのも、正しくこれから得來つたものであらう。所謂國民的敘事詩としては、我が文學史上第一に推すべき作であると、自分は常に思つて居る。今泉定介氏の「講義」がある、(誠之堂)

◎源平盛衰記 (博文館、帝國文庫第五編)

記事は平家物語と大同小異であるが、こちらの方が少し周密に書かれて居るやうに思ふ。そして叙述が周密な位だから、文章も自ら一層華麗富麗である。作者は双方とも不明で、或は二者の中何れか、他の作を粉本にして書き直したのだとも云ふ。文章は盛衰記の方が、いくらか古いだらうとの説である。

◎會我物語

後世敵討物の濫觴で、五郎時致が繩付のまままで將軍頼朝と問答する條など、眞に痛快を極めて居る。

◎方丈記 (日本文學全書第二編)

作者は鴨長明。四六版にして廿二頁ほどの極く短いものではあるが、鎌倉時代隨筆中一二を争ふ名文である。洛外日野山に隱遁して其處に方丈の庵を結び、「手の奴、足の駕よく我が心に適ふ」閑寂の樂みを縦まにしながら一種の厭世的人生觀を述べたもの。今はどうか知らないが、自分等が中學生の時代には、あまり厭世的思想だから、教科書の中に入れることは禁じられて居た。兎に角文章はうまいものである。これも今泉氏の「講義」がある。(誠之堂)

◎日蓮上人御遺文 (東京府下池上本門寺藏版)

日蓮上人の消息其他を集めたるもの。熱烈燃ゆるが如き彼の信仰は、自らにして此崇高雄大の文字をなした。斯くの如く力のある文章は滅多にない。高山樗牛氏なども大分感化を受けられたやうである。

◎住吉物語 (文學全書第一編)

元來平安朝に住吉物語と云ふのがあつたさうだが、それは今日に傳はらぬ。これは鎌倉時代に出来たもの。従つてあまり讀みづらくはない。繼子いちめの話。「嵯峨野の小松引」の條など、夙に名文と云はれて居る。

◎十六夜日記 (同上第三編)

作者は阿佛尼。末子爲相の爲めに鎌倉へ訴訟せむとて出で立つた、其紀行を日記の體裁にしたものだ。婦人の筆ゆるゑ、弱々しい調子ではあるが、またなかく〜に棄てがたいところもある。

◎太平記

(文學全集第十六、十七、十八編)

南北朝五十餘年間の戦亂を記した、室町時代軍記物の最も傑出したるもの。文章はかの平家物語、源平盛衰記をも凌ぐ位に、絢爛華麗を極め、後年馬琴などの盛むに使用した七五調なども、そろ／＼其萌芽を發して居て、叙述の間、作者また其渦中に投じて、自ら泣き、自ら訴ふるところに特色がある。有名なる兒島高德の事、正行が如意輪堂のことをはじめ、大塔宮熊野落の條、俊基朝臣東下りの條などは、最も人口に膾炙してゐる。「太平記註釋」がある。(誠之堂)

◎吉野拾遺

隱士松翁の作と傳へられて居る。吉野の宮に仕へて居た人ででもあらうか。文體は平安朝振りの和なのではあるが、さすがに慷慨の情が言外に溢

れて居る。

◎増鏡

(文學全集第二十四編)

鎌倉時代の初めに筆を起し、後醍醐帝隱岐國より還幸せらるゝまでを、優美な調子で書いたもの。其發端に、嵯峨の青涼寺で年寄りの尼が物語つたのを筆記したやうに書きなしたのは、平安朝の「大鏡」に倣つたのである。鎌倉時代にも同じく「大鏡」をまねた「水鏡」と云ふのがあつて、併せて之を三鏡と稱すれど、「水鏡」は極めて下らないものである、讀むに足らぬ。

「増鏡詳解」がある。(佐藤球、和田英松共著)

◎神皇正統記

作者は北畠親房。神武以來の帝統を記して、南朝が天津日嗣の正統なるを示したるもの。間々議論をも挟むで、極めて森嚴なる筆致である。一寸見

ては文章が餘り地味なので、何でもないやうに思ふが、一部の人は非常に賞賛する。正統記出で、國文はじめて議論ありとさへ云つた人もある。新井白石の「讀史餘論」なども、正統記に負ふところ甚だ少くないさうだ。猶親房に「關城書」(經濟雜誌社、群書類從中に)と云ふのがあるが、常陸關の城に據つて高師冬を防いだ時、結城親朝に與へて、南朝に御味方せむことを諭したもの。義を説き情を叙べて滔々數千言、是また非常の名文であると云ふ。正統記には今泉氏の講義がある。(誠之堂)

◎徒然草 (文學全集第一編)

作者は兼好法師。隨筆文中第一位に置くべきもの。觀察の奇警にして銳利なる、趣味好尚の多角的なる、また文章の簡潔にして、透徹せる、殆んど是と比肩すべきものがない。さればこそ、古來之を註釋せるもの、多き、

其數凡そ數十種もあらうと云ふ。最も廣く行はれるのが、北村季吟の「文段抄」、活版本がある。

◎謠曲 (博文館、大和田建樹氏謠曲通解)

總べて三百番もある。其多くは足利時代に出來たので、三代義滿の頃から非常に流行つた。作者は大抵禪僧などであつたらしい。神事、祝言、修羅物(幽霊)、鬘物(戀)などの區分があるのを見ても、内容の如何なるものなるかは略ば分らう。謠ふ部分は韻文、語の部分は散文、そしてその韻文のところは華麗な語句を、無暗矢鱈に引張つて來て鎖つなぎにただけで、全體としてはまづ不調和、不統一、不得要領なものが多いけれど、しかし部分くにはいづれも皆名文句があり、文章を作る人の參考にはいゝものだ。後世の淨瑠璃などもだいたい之を材料として居るやうに思ふ。讀む人は

そのつもりで讀むがよい。近頃出來た「謠曲二十番」でも其一斑を知るに足る。

◎狂言 (博文館、幸田露伴氏校訂狂言全書)

謠曲の陰氣で眞面目なのに對し、之は陽氣で滑稽。語は當時の俗語だが、その中に云ふべからざる面白味がある。材料も世間の小事件、そして地の文はよく、對話ばかりて出來るところは、謠曲よりも一層戯曲的である。是も總體は二百番もあるが、やはり名著文庫の「狂言二十番」で一斑は分らう。

◎お伽草子 (誠之堂、お伽草子、新編お伽草子)

鉢かつぎ、物臭太郎、御曹司島わたり、玉蟲草子、唐糸草子など、短い兒童向きの物語である。文體は雅文擬ひのもので、ゑかも幼稚なものではあ

るが、その無邪氣なところに面白味もある。そして徳川時代の小説が、多くの材料をこれから取出して居るのを思へば、一度は讀むで置いていゝものだ。

◎藩翰譜 (國書刊行會、新井白石全集)

◎讀史餘論 (同上)

◎折焚く柴の記 (同上)

◎西洋紀聞 (同上)

何れも新井白石の作。事を叙しては、或は周密に、或は簡勁に、議論を立て、は正々堂々、寸分隙間のない文章である。それに有名なものでもあるからして、一遍は是非目を通して置くがよからう。

◎駿台雑話 (誠之堂、關義一耶註釋あり)

作者は室鳩巢。隨筆として可なり名あるもの。

◎花月草紙 (宮山房、袖珍名著文庫第十九編)

政治家にして而も文學の才があつた松平定信、即ち白河樂翁の隨筆。

◎雨月物語 (同上第三編)

◎春雨物語 (同上第二十八編)

作者はいづれも上田秋成。雨月物語は徳川時代雅文の物語中白眉と稱せられて居る。就中「白峰」の條などは、馬琴は之を愛誦の餘り、其著「弓張月」の「爲朝白峰に詣づ」の條に轉用した位。其他「菊花の契」や、「淺芽が宿」や、何れも讀む人の心を魅するやうなロマチックな話で、故小泉八雲(ラフカディオ・ハアン)氏の英譯もある。文法上などから見ると、少々の疵はあるが、一帯に簡勁な、力のある筆致。美文をやる人などには是非一讀を奨め

たい。春雨物語の方は晩年の作文けに、一層直截老蒼に出來て居ると云ふ評判だ。

◎奥の細道 (博文館、俳諧文庫第一編、芭蕉全集)

作者は松尾芭蕉。「月日は百代の過客にして、行交ふ人も亦旅人なり。船の上には生涯を浮べ、馬の口取らへて老を迎ふる者は、日々旅にして旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり」といふに筆を起し、「予も片雲の風に誘はれて漂泊の思止まず」とて、一歳奥羽の方へ行脚の狀を記したるもの。俳文の鑑として、又氣品高き紀行の文として世に歎稱せらるゝものである。紀行には猶ほ「野晒紀行」、「吉野紀行」など多くある。「行脚掟十八ヶ條」と芭蕉の風韻を偲ぶに餘りある。殊に「吉野紀行」の冒頭一節は芭蕉を語るに必ず引用されるもの。此外に所謂俳文や消息文の精妙なるものが澤山

にある。晉に俳句をやらうと思ふ人ばかりでない、苟くも文學にたづさわるほどのものならば、是非々々彼れが全集を座右に備へて置かなければならぬ。

◎鶉衣 (同上第六編、也有全集)

俳文は横井也有で發達の頂點に上り、鶉衣よりさきへは上れないと云はれて居る。芭蕉の幽玄はないが、洒落輕妙は迥かに優つて居ると云ふ。これは也有の没後に蜀山人が版行したるものである。佐々醒雪氏の「評釋」がある。(明治書院)

◎御伽婢子

作者は淺井了意。江戸時代小説の先驅をなせる假名草子中、最も傑出せるもの。支那小説「剪燈新話」を翻譯したもので、幾多の奇談珍説がある。

有名なる牡丹燈籠の講談も、是から材を得たものださうな。

◎西鶴物

性格事件の描寫と云ひ、文章の上の技巧と云ひ、古往今來、我が國文學史上に於て、西鶴の右に出づるものは、殆んど無いと云つても差支ない。もしゆらば源氏物語の作者か、近松門左衛門位なものたるが西鶴には肉感と挑發するやうな文字があつていけないと云ふ理由の下に、折角活版本になつた帝國文庫の「西鶴全集」も發賣禁止。是ほど残念なことはない。此頃平民書房から又「西鶴全集」と云ふのが出たけれど、恣まに文章を彼方此方糺合はしたりなんかして、往々眞の筆致を損ねて居るさうな。しかし、西鶴文粹上、中、下(紅葉、露伴共選、春陽堂)日本永代藏(櫻庭篁村校訂、富山房)懷硯(帝國文庫、珍本全集上卷)名殘の文(全上)近代艶

これの
たい
な



隱者(同上中卷)などがあるから、全然絶望するには當らぬ。就中主要なるは所謂好色本。その「一代男」、「一代女」の類は「文粹」の中に抄録されて居る。所謂彼が文章の簡勁透徹にして、しかも飽くまでも絢爛を極め、華麗を盡したる妙想靈筆は、讀むで見ない中は想像も付かぬ。實に驚嘆すべき天品である、鬼工である。紅葉、露伴、一葉等の諸氏も随分西鶴は讀んだので、また一時は所謂西鶴張の文章が、殊に小説界を風靡したものだ。が、西鶴のエライのは其文章ばかりではない。觀察や描寫がまた非常なもので、よくもあゝまで、寫實的なものが、日本の昔の文學にもあり得たものだと思ふ位である。

◎八文字屋物 (帝國文庫、第廿七、八編、其磧自笑傑作集)

自笑は京都の書肆八文字屋の亭主で、實は其磧が主に書くのだが、名を出

すことを厭ひ、八文字屋名義で出版したのだ。西鶴の輕妙洒落な方面を承繼いた小説で、當時非常な流行を極めたものである。「傾城禁短氣」、「傾城歌三味線」等をはじめとして、「親仁氣質」、「子息氣質」、「娘氣質」、「手代氣質」など、随分有名なるもの。

◎近松淨瑠璃 (帝國文庫第四十二編近松時代淨瑠璃、第五十編近松世話淨瑠璃)

元祿時代の、徳川時代の、實に日本の文學史全體を通じての、二大明星として、西鶴と並び稱せらるゝものは近松門左衛門である。全體の傾向として、西鶴の寫實的なるに對し、是は寧ろロマンスチックだが、文章は人の好々で、一概にどちらがすぐれて居るとも云へぬ。時代物なる「國姓爺合戦」は十七ヶ月も演じ續けたと云ふ位で、當時は寧ろ其方が受けたらしいけれど、今日我々が讀むで見ると、文學上の價值はどうしても世話物即ち心中

Handwritten signature and notes in the left margin.

物の方がすつと上にあるやうに思ふ。何れも傑作は右の二冊と續帝國文庫の「續近松淨瑠璃集」とに大抵集めてある。傑作の中でも傑作と思ふのは「天の網島」「心中萬年草」「戀八卦柱曆」「會根崎心中」「女殺油地獄」「宵庚申」「鎗の權三重帷子」「冥途の飛脚」等。「網島」には佐々醒雪氏の精しい「評釋」(明治書院)がある。「近松の研究」といふは逍遙氏等同人の著、参考すべきものが多い。樽牛全集にも「巢林子の研究」が載つて居る。近頃「近松全集」の出版があつたけれど、まだ上巻だけしか出て居ないやうだ。

◎其他淨瑠璃の有名なるもの

紀海音きのかいおんの名作は「八百屋お七」「鎌倉三代記」「心中ニッ腹帯」(續帝國文庫、紀海音淨瑠璃集)竹田出雲のは「假名手本忠臣藏」(富山房袖珍名著文庫)

「菅原傳授手習鑑」「義經千本櫻」(帝國文庫、淨瑠璃名作集)。近松半二のは「本朝二十四孝」「關取千兩幟」「妹背山女庭訓」(同上)。そしてこれ等のものゝ多くは山本九馬亭の「淨瑠璃通解」にも收めてある。猶平賀鳩溪の「神靈矢口渡」などから、「伽羅先代萩」(近松貫四)、「加賀山むかしのにしき舊錦繪」(容揚いだい黛)、「碁太平記白石嘶」(烏亭焉馬)など注意すべき作である。總じて戯曲の方をやらうと云ふ人は、西洋文學の素養がなくてはいけないのは云ふまでもなけれど、なほかう云ふ我國從來の淨瑠璃などを、精しく調べて置く必要がある。

◎日本歌謠類聚 (續帝國文庫)

我が國上古、紀記、續後紀中にある大歌、童謠、雜曲より、中古の神樂歌、催馬樂、今様等を経て、近き世の長唄、端唄、琴唄に至るまでを集めて上

卷とし、下巻には汎く各地方の俗謡流行歌をのせた。創作上の材料としてまた刺戟として非常に大切なるもの。とりわけ韻文をやる人達にとつては古今集や、新古今などをよむよりか、すつとためになる。試みに上巻第三編其三、「曉明星」「月細く」第四編其一小唄の中端手組長崎の「むかしより」同上裏組八幡の「月は八幡の」同上、隆達節唱歌の「鐘さへ鳴れば」「夢の浮世の」などを讀むで見ることがよい。恐らく何人と雖驚かすには居られまい。

◎鳩翁道話 (袖珍名著文庫第二十編)

作者は柴田鳩翁。心學と云ふものを説いたのであるが、巧妙な言文一致で譬喩引例にも富み、又よく世態人情を穿つた節が多い。

◎歌道大意

作者は平田篤胤。文の猛烈なる、日連上人御遺文と好一對。一度は是非讀むで見るとべきものだ。

◎本朝醉菩提 (帝國文庫、京傳傑作集)

作者山東京傳。京傳が神史よみほんの傑れたるものは、猶ほ、「稻妻表紙」「櫻姫全傳曙草紙」「忠臣水滸傳」など。洒落本、即ち狹斜の巷を描いたものには、「傾城買四十八手」「白川夜船」「夜半の茶漬」「洞房妓談繁々千話」、等あり京傳が才筆は却つて其方面に現はれて居るとのこと。

◎八犬傳 (帝國文庫、第六、七、八編)

◎弓張月 (同上第三十九編「四大奇書」の中)

作者は瀧澤馬琴。從來隨分讀まれたものではあるが、文學上の價値はそれ程にない。今の言葉で云ふと、寧ろ淺薄なる理想派で、勸善懲惡を説くに

のみ忙しく、結構布置も不自然で、作中の人物も生きて居ないのみか、文章にもしみじみとした味がないやうに思ふ。もつとも是迄久しい間讀書界の流行を支配して居た丈けあつて、文學趣味のまだそれほどに發達しない人達が讀めば、決して面白くないことはない、まかし、讀むならば其積りで御讀みにならむことを望む。

◎諺にせむらさき紫田舎源氏(續帝國文庫第五編)

此作者柳亭種彦は嗜好も風采も優美閑雅な男で、源氏物語の翻案者たるにふさはしかつたと云ふ。光源氏を室町時代公方様に直して、詞藻も流麗。随分と士女の喝采を博したるもの。猶ほ「邯鄲諸國物語」(續帝國文庫第廿三編)も名高く、「國字水滸傳」は他の多くの類本のやうに擬作ではなくて原作のまゝを和譯したのだ。そして是は泉鏡花氏が愛讀書の一つであると聞

いた。

◎春色梅曆(帝國文庫第十編)

作者爲永春水。草双子の全盛が種彦にあつた如く、人情本は春水の右に出づるものなした。随分卑猥な文句などもあつて、非難は受けるが、其描寫の上の手腕はなかくすばらしいものだ。小説でもやらうと云ふ人には、だいぶ参考にもならうと思ふ。此作が如何に時の人の嗜好に投じたかは、作中の主人公「丹次郎」が色男の代名詞となり來つたのを見ても分らう。

◎浮世風呂(同上第十三編、三馬傑作集)

◎浮世床(同上)

いづれも式亭三馬の作で、滑稽本中一二を争ふもの。穿ちや洒落の趣味を養ふのには絶好の材料である。

◎東海道膝栗毛 (同上、第九編)

作者は十返舎一九。主人公彌次郎兵衛、北八の失敗談は、あまり上品でもないが、兎に角笑はずには居られない。

◎源氏物語 (日本文學全書第八、九、十、十一、十二編)

作者紫式部は王朝時代才媛中の才媛。日本の文學史上、もし、後代の西鶴近松と此人の三人を除いたならば、如何に寂寞たるものであらう。文章が華かで、艶のあることは全く言語道斷。平家物語や太平記などは足下へもよりつけぬ。上田敏氏の美文集「みをつくし」などには餘程其影響が現はれて居る。與謝野晶子女史や、位彌に一葉女史などもたいぶ愛讀せられたことがあるやうに見受ける。是はなかく、大部なものであるし、古文の性質として讀みづらいものであるが、まかし、之は韻文をやる人、散文をや

る人に限らず、是非ともお讀みになるがよい。評釋としては萩原廣道のがいのであるが、惜しいことに花の宴までしかない。で一般には北村季吟の「湖月抄」が行はれてゐる。活版本が容易に得られる。近頃長文學士の「源氏物語梗概」(新潮社)が出た。全文を四百頁の間に縮め、流暢な文章で其大要を書いたものだから、容易に全豹を窺ひ知ることが出来る。

◎枕草子 (同上第二編)

作者清少納言は紫式部に次いで才媛。觀察の銳利にして筆力の精勁なること、古今獨歩。松平靜氏の「評解」(誠之堂)が分り易い。季吟の「春曙抄」も活版本でたやすく求められる。

◎榮華物語 (同上第十三、十四、十五編)

◎大鏡 (同上、第二十三編)

共に藤原氏榮華の態を寫したもので、前者は艶麗を以て勝り、後者は莊重を以て現はる。源氏をひと通り讀む人は、更に此二書に就いて、源氏にも見られぬ味を、味はつて貰ひたい。「榮華」には落合、小中村二氏の詳解（明治書院）があり、「大鏡」には和田英松、佐藤球二氏の「詳解」（同上）がある。

◎七佐日記（文學全集第二編）

作者紀貫之と云ふ人は、どちらかと云へばむしろ批評家で、創作は餘り得意でもなかつたらしいけれど、どうしたものか此七佐日記など、大變有名なものになつて居る。一度は讀むで置くのがよからう。

◎伊勢物語（同上第一編）

作者は在原業平と傳へられて居る。簡古なる調子の中に、燃えるやうな熱

情が溢れて、實に千古の名文である。歌と其前書とから成立つた一種自叙傳的の日記で、歌もいゝが前書もいゝ。「水沫集」時代の森鷗外氏の美文などには、此文の調子が少からず這入て居たやうに思ふ。自分も是は愛讀書の一に加へて居る。今泉氏の「講義」（誠之堂）がある。

◎竹取物語（同上）

これは日本に於ける最も古い小説ださうな。田中大秀の「竹取物語解」がある。

◎萬葉集

人間自然の聲をそのまま文字にしたやうなもので、些の矯飾もなく、誇張もない。支那の詩經などと比べても決して遜色はなからうと思ふ。今日の所謂新派和歌も、其一面はたしかに、古今新古今あたりの流れを汲む、不

自然なる形式主義に對する反動として起つたものと見られるので、韻文をやらうと思ふ人達は特に之を精讀する必要がある。橘千蔭の「萬葉集略解」活版本になつたのがある。(修學堂)

◎古今集 (博文館、歌學全書)

萬葉集に比べては劣るけれど、まかし一度は是非とも見なければならぬのだ。契沖阿闍梨の「餘材抄」、加茂眞淵の「打聽」、本居宣長の「遠鏡」、香川景樹の「正義」などによるがよい。近頃出來た「評釋」には金子元臣氏のが(明治書院)ある。

◎新古今集 (同上、第七編)

面白くない歌の這入つて居ることは古今集以上だが、それでも新古今には新古今特有の味もあつて、強ち棄てるわけには行かぬ。註釋には北村季吟

の「抄」、石原正明の「尾張の家苞」等あり。新しく出來たものでは、鹽井

雨江氏の「新古今詳解」(明治書院)がある。

◎祝詞、宣命のりこと、せんみち

祝詞は神を祭る詞、宣命は臣民に下す詔。前者には「大祓の詞」など云ふ莊重森嚴なる文字あり、宣命には「藤原永手を弔ふ」などの如き真情溢れたるものがある。久保季弦の「祝詞略解」本居宣長の「歷朝詞解」等参照。

◎風土記

元明天皇の朝に、國々に命じて奉らせた一種の地方誌であるが、惜しいかな今日に傳はるは、出雲、常陸、播磨、肥前、豊後だけ。之は歴史上は勿論文學上なかく價值がある。

◎古事記

日本最古の歴史とも、神話傳説とも見られる。事は日本開闢の曙光を歌つた一大詩篇と云つてもよい。文章は雄健にして、まかも簡朴無比。薄田泣菫、蒲原有明等の諸氏は屢々此中から叙事詩の材料を取り出された。坪内博士の樂劇「常闇」なども同じく是から出てゐる。尙ほ今後も大に研究し、大に利用されなければなるまいと思ふ。井上頼國氏の「標註古事記讀本」(明治書院)、川上廣樹氏の「譯讀古事記」(經濟雜誌社)は假名交りに書直しもので、非常に便利だ。

以上は明治維新に至るまでのものを挙げたのであるが、次ぎには明治になつてから後の有名なる、そして諸君の御参考になるやうな述作を少しばかり紹介して置く。

◎小説眞髓 坪内逍遙

寫實主義の立場から、舊來の淺薄なる理想派を斥け、當年の文壇に新潮流を導き入れたもの。今日から見れば、さう大した議論でもないけれど、とにかく日本今日の小説が、此書に負ふところは決して少くない。

◎書生氣質 同上

之は小説眞髓の議論を、實地に應用したる作物として見られる。是が初めて出た時の評判は實にすばらしいものであつたさうな。

◎牧の方 同上

◎桐一葉 同上

いづれも脚本。シエクスピア通の作者が、國劇の革新を思立つて書いたもの。

◎新樂劇論 同上

◎新曲浦島 同上

前者は我が國劇の將來まさに振事中心の樂劇を以て本位とすべきことを論じたるもの、後者は其樂劇の見本なり。

◎水沫集 森鷗外

歐羅巴文學の翻譯に兩三篇の創作を加へたもの。作者の筆は自ら大家の風がある。集中、「埋木」、「惡因縁」、「舞姫」、「うたかたの記」、「文使」等は、何邊線返して讀むだか分らない。一時絶版になつて居たが、昨年の春頃か、少しく體裁を改めて三たび文壇に現はれた。是は是非ともよむべきもの。

◎即興詩人 同上譯

丁抹の詩人クリスチアナ・アンデルゼンから譯したもの。謹嚴にして幽麗

ぬ。

◎月草 同上

重に「柵草紙」「めさまし草」等に出た評論の文を集めたもの。美學者としての、また批評家としての鷗外漁史を見るべし。

◎二人浦島 同上

我が浦島傳説に材料をとつた劇詩。短いものではあるが、坪内氏の「新曲浦島」などよりか、直接文學上の價值が多いやうに思ふ。

◎いさなどり 幸田露伴

◎風流佛 同上

◎椀久物語 同上

◎五重の塔 同上

◎二日物語 同上

露伴氏の小説は、近來あまり評判がよくないやうだけれど、何と云つたつて老大家たる事は争はれぬ。夏目漱石氏の「坊ちゃん」や「草枕」や「ぐびじんさう」に狂奔する目を以て、再び如上の作物を見かへしたなら、露伴氏の老大家なる所以がよく分るであらう。

◎紅葉全集 尾崎紅葉

兎に角、從來の小説壇に於ける大立者である。「おぼろ舟」、「心の闇」、「二人女房」、「多情多恨」等は傑作中の傑作。「金色夜叉」は世間では大相やかましく云ふけれど、あれは寧ろ成功の作でない。

◎一葉全集 樋口一葉

紫式部以來の才媛たりしこと、文壇の定評と云つても宜しい。女史の作で最も傑作と思ふのは「たけくらべ」と「濁江」。「十三夜」、「われから」、「わかれ道」なども悪くない。かう云ふ天才を二十四や五で死なしたかと思ふと残念でたまらぬ。婦人で多少天才でもあるやうな人は、ともすれば、思想や感情がすつかり男子のやうになつて、女に特有なる美しいところを失つて了ひがちなものだが、一葉女史はどこまでも、女らしい作家であつた。婦人の方で文學をやらうと云ふ人には、特に一葉全集の精讀をすゝめます。

◎通俗書簡文 同上

純文學上の作品として立派なもの。

◎橋牛全集 高山樗牛

創作界に於ける一葉女史と相並むで、是は評論界に於ける夭折の天才。「時

代管見」の頃夙く已に「わが袖の記」の如き趣味を一面に藏して居たが、晩年病床に臥してより、著しくニイチエと日蓮上人との影響を受け、いよゝゝ其天分を發揮した。乃ち、「美的生活論」あたりから後の文章は、凡べて皆詩である。

◎湯島詣 泉鏡花

◎高野聖 同上

◎照葉狂言 同上

近來の傾向はあまり感心出來ないけれど、所詮此人の文章は天品である。茲にかゝげたのは、全體として筋の通つたものだけ。それとても尙ほすつかり網羅し盡したとは云へない。此外にいくらもないのがある。殊に部分く、一節く面白味を云へば、一篇として棄つべきものはない。

◎はやり唄 小杉天外

寫實小説と銘を打つ丈けのものはある。但し此作丈けの話である。

◎河内屋 廣津柳浪

◎今戸心中 同上

紅葉露伴全盛の時代には、深刻を以て稱せられたもの。

◎藤村詩集 島崎藤村

此人はどうしても叙情詩人だ。小説よりか、詩の方が面白い。

◎暮笛集 薄田泣菫

◎行く春 同上

◎白羊宮 同上

◎二十五絃 同上

最近詩壇の傾向は、夙く已に泣菫氏をも通越したやうな感がないではないが、しかし兎に角、藤村詩集と共に一度は是非讀むで見るとべきもの。

◎鐵幹子 與謝野寛

◎紫 同上

◎うもれ木 同上

◎毒草 與謝野寛同晶子共著

新らしい詩が起つてから以來の大家である。創作の模範として是ほどたしかなものはない。

◎みだれ髪 與謝野晶子

◎小扇 同上

◎黒髪 同上

◎戀衣 與謝野晶子、増田雅子、山川登美子共著

晶子女史の詩は徹頭徹尾天才の詩である。

◎小詩國 金子薫園

◎わがおもひ 同上

◎まひる野 窪田空穂

◎草わかば 蒲原有明

◎獨絃哀歌 同上

◎春鳥集 同上

昨年の後半より本年へかけて、新詩壇の中心は泣菫調より有明調に移つた。詩人としての實際の技倆は與謝野氏夫妻などに比して、だいぶ下にあるやうだけれど、今はたしかに新詩壇の新傾向を支配して行く地位に居る。

◎文藝論集 上田敏
◎文藝講話 同上

明治の文壇を通じて此人ほど多方面なる趣味を有つて居た人はなからう。文献學の智識に富めることも驚くべきものだ。之を夏目漱石氏と比較して「夏目氏の學問は狭くして深し、上田氏のそれは廣くして淺し」とやうに評する人もあるが、あれは間違つた批評である。上田氏の學問は廣くしてしかも深い。右の二書ともに讀むで非常に利益になる。

◎みをつくし 同上
森鷗外氏の「水沫集」と並び稱せらるゝ翻譯集。創作も兩三篇加へてある。
◎耶蘇 同上

美文としての値あるもの。敏氏の述作を滅多にほめたことのない樗牛氏

さへも是丈けは流石にほめた。

◎海潮音 同上

最近の詩壇に、非常の貢獻をなした譯詩集。

◎戀慕流し 小栗風葉

◎親子 同上

◎十七八 同上

◎梢の花 同上

◎豫備兵 同上

◎青春 同上

◎天才 同上

自分のあとから、いくら新らしい傾向を追ふ人が出て來ても、其新傾向の

好いところはみんな吸収して、其上に出る作品を提供して行くところ、新詩壇に於ける與謝野寛氏と好一對。思ふに此二人は、大家としての地位を最も長く持續することが出来る人だらう。

◎漾虚集 夏目漱石

◎鶉籠 同上

◎虞美人草 同上

◎吾輩は猫である 同上

新進の人にして此人ほど貫目のある人は外にない。前きに輕佻なる文壇の雑兵どもによつて、無性矢鱈と擔ぎ上げられた反動か、漱石ももう下り阪だなど云ふ人もあるやうだが、自分達の見るところでは、世間の評判はともあれ、漱石氏自身はまだく老込み相もない。

◎文學論 同上

文學總體に對する組織的研究。議論が充分に消化されても居るし、また頗る創見にも富むで居る立派なものだ。

以上掲げたるもの、外、尙ほ是等諸家の述作に、有益なるもの、面白いものはいくらかもある。また爾餘の作家にも立派なものが澤山にある、ことは勿論である。

次ぎには漢文即ち支那文學史上の有名なる作品を少しばかりこゝに紹介して見よう。

支那の文學が、我が文章に影響したことは非常なもので、もし漢文漢詩の影響がなかつたなら、我が國文學はどんなに寂寞たるものであつたらう。漢

文の國文學に對する關係は、宛かもかの希臘、羅馬の古典文學が中世より近代へかけての歐羅巴文學に對する關係の如きものである。殊に支那唐宋あたりの文學は、こちらへ渡來してから後長い間の年月をへて、すつかり日本固有の文明思潮と同化して仕舞つたので、これなどはさながら國文學の一部分、重要な一部分として見る事が出来る。將來文學を以て立たうと云ふ人の、漢文を研究しなければならぬ所以は、是だけでも已に明かであらうと思ふ。

◎詩經

三百七篇、殷より春秋の時代に至るまでの詩を孔子が輯めたるもの。作者は一々詳らかでないが、凡べて人間自然の聲にして、蔽はず、飾らず、我が萬葉集などと似通つたものである。是非一度讀むで見るがよい。

◎論語

孔子の言行、孔子と弟子の問答や、また弟子同志の問答や、當時の人の言説や凡べて孔子に關聯して起つたことを、孔子の没後、其弟子が纂録したもの。哲學上、倫理學上の意義は擱き、單に之を文章として見るも、こんな名文は滅多にあるものでない。註は數知れぬほど多くあれど、成るべくは字義の解釋丈け註にたよることにして、あとは自家一流の讀み方をする方が面白い。

◎莊子

周の莊子の著。一に南華真經といふ。この書説くところは恬淡、無爲、寂寞、虛無の道、哲學として見るのも面白いが、文章の奔放雄大なること、これまた多く比類を見ぬ。

◎十八史略

史記、前漢書、後漢書、三國志、晉書、宋書、南齊書、梁書、陳書、北魏書、北齊書、周書、南史、北史、隋書、唐書、五代書、宋史、すべて十八史の事實を省略して集めたるもの。元來支那に於ても、初學者の爲めに作つたもので、讀み易く、解し易いから、外國語として漢文を學ぶ人には、讀本代りにもなるのだ。

◎文章軌範

軌範とすべき文章を集めたるもの。凡そ六十九篇。うち、陶淵明の歸去來辭、諸葛孔明出師表の二篇を除けば、凡べて唐宋諸家の作である。是は精讀するがよい。

◎唐宋八大家文

文章軌範と同じく、範とすべき文章を集めたるもの。八家とは韓退之、柳

子厚、歐陽修、蘇元明、蘇東坡、蘇穎濱、曾子固、並びに王安石。本書は前者とともに、我が國文學に最も大なる影響を及ぼしたものである。

◎唐詩選

五言古詩、七言古詩、五言律、五言排律、七言律、五言絶句、七言絶句に分ち、唐の詩人百二十餘家の詩を録したものである。古來人口に膾炙せる詩集として、是非とも一讀するの必要がある。

◎古文眞寶

七國より宋に至る諸家の詩文を録す。前集の十卷には各體の詩を輯め、後集の十卷には各體の文章を集む。文章軌範、八大家文などと同種の物で、わが國では足利時代に最も廣く行はれたといふ。

◎水滸傳

元朝の小説。として最も有名なるもの。宋末群盜の事蹟を材料とし、文章はまづ言文一致體。施耐庵の作ならむと云ふ。

◎三國志

羅貫中の作、水滸傳と並び稱せらるれど、實際は、意匠も、文章も、だいぶ水滸よりは劣る。

◎西廂記

王實甫の作と傳ふ。今日坊間に流布する西廂記は金聖嘆の改訂をへたるもの。意匠結構は必ずしも激賞を値へせざれど、文章は正に天下の逸品である。

◎琵琶記

前者と同じく元代の戯曲。高則誠の作。意匠は西廂記に比して遙かに多端

其文は清雅冷艶なるも、西廂記の婉麗豊贍なるには遠く及ばず。

◎西遊記

作者長春真人。唐僧玄奘が佛經を求むる爲めに天竺へ出掛けて行く、其道中を譬喩にして教を説いたもの。奇想妙想驚くべきものがある。

◎金瓶梅

西遊記と並び稱せられて居るが、複雑なる情話を脚色して、個々の性格を描寫せるところ巧妙を極めて居る。たゞ少々猥褻に流れたのが瑕だ。

◎高青邱の詩

◎吳梅村の詩

◎李攀龍の詩

何れも明の詩人。中にも高青邱は英吉利のバイロンに比べられたことがあ

る。其熱情に富むで居るところ、似て居ると云へば似て居る。

◎紅樓夢

清朝小説中の白眉。曹雪芹の作と云ふ。通篇百二十五回の大作。三百三十五人の男子に二百十三人の女子を配合し、多少の藝氣はあれども金瓶梅の甚しきに至らず、人情の細微を穿つところ、他に其比を見ない。加ふるに華團錦族の文字燦爛として人目を奪ふものがある。

最後に、外國の文學に於て、是非とも先づ讀まなければならぬと思ふものを、少しばかり紹介するつもりであるが、その前に一寸この外國文學研究の必要と、並びに其方法とに就いて申上げて置きたいことがある。

御維新以來我が國の文化は、随分長足の進歩發達をなして來た。そのかく

の如き長足の進歩發達をなして來たのは、どう云ふわけかと云ふに、それは即ち、一時に外國の優秀なる文化を輸入し、模倣して、歐米諸國が三世紀五世紀もかゝつて作り上げた文明を、僅々數十年の間に作り上げようと云ふ、その熱心なる努力のお蔭である。

輸入と模倣とは、事實上此半世紀間我が日本の國是であつた。が、是から先はどうであらう。もう輸入や模倣の時代は過ぎ去つたのであらうか。然りと答ふる人は恐くあるまい。社會のあらゆる方面に於て、我等尙ほ彼等外國人に五歩十歩を譲らすには居られぬ。とりわけ文藝思潮の上に於ては、彼と我と、其間に非常の懸隔があつて、とてもこゝ五年や十年の中に、追付いて行かれ様とは思はれぬ。残念乍ら模倣の時代である、輸入の時代である。

傳統ある自國の文藝の、第一に尊重せらるべきは勿論のことながら、その

自國文藝に足らざるところを補ひ、深刻なるものをして、更に一層深刻ならしめ、豊富なるものをして更に一層豊富ならしめむが爲めに、異邦の作品作家に近づくことは、彼此發達の程度に太しき相違を見ざる歐洲各邦に於てもあることである。所詮、外國文學の研究と云ふことを輕じていゝわけではないのである。

個々の作家に就いて云つて見ても、今日最も新しい技巧と尤も新しい思想とを有して居ると云はれる人は、大抵皆熱心なる外國文藝の研究者である。外來の文藝思潮に觸れない人は、始終之に觸れて居ない人は、激しい時勢の推移にとり殘されて、いつとはなく凋落の運命に遭ふ。

外國の文學を研究するには、勿論外國語の素養を作ることが必要だ。精確なる語學の力を養ふことが必要だ。蓋し、語學其物は文學を研究する上の方

便なので、語學がいくら上達したからとて、それだけで文學の研究とは云へないが、まかじ、精確に外國の文章をよむことが出来ないで、其文學の解る筈はない。語學と文學とが同一物でないからとて、語學の勉強を等閑に附してよい理由はない。

元來外國語と云ふものは、さうむづかしいものではない。一通り一つや二つの外國語に通ずる位、何でもない。平々凡々の人間で出来ることだ。寧ろ天才などのない方が早くやれる位のものだ。さう云ふ譯のない外國語が、三年やつても五年やつても物にならぬのは、つまるところ、やる當人の心掛けが悪いのだ。

語學と云ふから、學問のやうに思ひ、語學者と云ふから學者のやうに思ふ、是が心得違のそもくである。語學は學問ではない、技術である。語學者は

學者ではない、技術家である。時勢の必要上、無暗と重寶がられては居るものゝ要するに、語學者は、分析も解剖も入らぬ、演繹も歸納も入らぬ、練習一つで叩き上げた技術家なのである、職人なのである。

さう云ふ語學者を、餘りに尊敬し過ぎるからよくないのだ。恐ろしかるから尙ほよくない。語學者を如何にもエライ人のやうに思ふから、語學もまた非常にむつかしいものゝやうに考へる。之がいけないのだ。

一通り本を読む丈けの語學なら五年も十年もかゝるべきものではない。それをやつぱり五年も十年もかゝるべきものと思ふから、大切なことは十二分に承知しながらも、兎角悠長にかまへるやうになる。悠長にかまへるから、いつまで立つても上達しないのだ。

語學はそのやりはじめに、少し思切つて蠻勇を鼓し、字引を片つばしから

暗誦する位なことを實際やつて見玉へ。一年か、せいゝ二年もたてば、一寸新聞や雑誌を読む位の力は附く。必ず附く。之は拳大の印を押してでも保証する。

外國語を勉強する上に必要なるその外の注意は、一切、語學の先生達に任する。たゞ先生達の悪い癖は、無暗と語學をむつかしいものやうに云つて、自分のエラサ加減を示さうとするところにあるから、さう云ふ場合、諸君たるもの、恐入つてはいけない。なほに語學位のもの、鸚鵡でさへもやることだと、頭から呑むでかゝるべしだ。

外國の文學を、悉く其原語に於て讀まうとするのは、勿論無理なことだ、所詮語學は一二ヶ國乃至は三四ヶ國に限つて置いて、それ以外の國の文學は翻譯でよむより外はない。偕て其外國語を選択する場合には如何なる標準に

よるかと思ふに、或は、日本今日の人がやるのに最も便利だと思ふところから、或は世界に於て最も廣く行はれると思ふところから、或は歐洲近代の文藝思潮と最も交渉の多い國だと思ふところから、また或は、文學以外の方面に於ても需要が多いと思ふところから選ぶのである。

かう云ふ種々の要件から考へて見て、最も適當だと思ふものは、やはり英獨佛の三ヶ國である。中にも英語は、是迄久しい間、我が國に於て最も汎く行はれて、歐羅巴の文學が輸入されたのも大抵は英語の媒介をへたものであることを思へば、また更に、勉強する上に最も都合よきもの、英語なることを考へて見れば、所詮第一外國語としては英語を選ぶべきであらう。そして英語だけ知つて居ても、露、獨、伊、西、諾等大抵の歐洲文學は、その英譯でよむことが出来るのであるが、しかし、出来ることならば、第二外國語と

して、獨逸語もしくは佛蘭西語をもやつて置くに越したことはない。

こゝには、先づ差當り英語を習つて、英文學の大體に通じ、それから他の國の文學をも味はうと思ふ、恐らくは今日最も多數の人が取るところの方針に基き、凡そ中學卒業程度位の英語の素養ある人を目安に置いて、英文學を中心としたる外國文學研究の手引きをする。最初に英吉利の文學から。

英吉利の文學とは上下六百歳に亘つて長い歴史のある文學である。で、英文學を専門に攻究しようとする人も、又弘く一般に外國の文學を調べて見ようと思ふ人も、最初はまづ近世、とくに十九世紀から讀み始めるのが最もよい。十九世紀は今のところ、最も手近い過去の時代で、思想や感情や、その他の周圍の事情から云つても、一番了解し易い時代である。それに言葉の上から見ても、ずつと古いところになると、いろいろ文體や、綴りや、語法など

が、今の英話と違つて居て、調べにくいと云ふ事情もあるのだ。とにかくい
ろ／＼の理由からして、先づ現在の時代に近いところから手を着けると云ふ
のが得策であらうと思ふ。まかし餘りまた餘り近寄り過ぎて最近の文學とな
ると、材料を集める上に困難もあつて、却つて不得策であらう。それ故大體
の順序は十九世紀をざつと調べて、順々に逆に十八世紀と溯り、それから最
後に最近の文學へ歸つて來ると、かう云ふやうにきめて置くがよい。偕て第
一に推奨したいのは、

◎William Swintons Studies in English Literature

普通に『スキントンの英文學』と云ふ名で通つて居る。一冊に纏めて製本し
てあつたのを、三省堂で翻刻して、上下二冊に分けた。上はキリアム・セク
スピア・フランシス・ベエコン、ジョン・ミルトンより下はジョージ・エリオット、ト

マス・ヘンリー、バックスレエに至るまで、英米文壇の主要なる詩人文學者を
殆んど悉く網羅して、諸家の略傳、其人物作物の短評があり、その後毎家
兩三篇づゝ其傑作逸品の全部又は一部を抜萃したものが輯録してある。其上
諸家の肖像もあり、難解の辭句には註釋もあり、修辭上の要點には問ひを設
けて讀者の注意を促してあるなど、中々丁寧な編輯の仕方がしてある。又抜
萃したものは、大抵必要に應じて、其前に前後の關係を説明してあるから、
それが爲めに困難を感じるやうなことはない。で此本の下卷の方から始める
のだ。そして同じく下卷に收めてあつても、同然読み易い人と読み難い人と
があるから、必ずしも此書物の上の排列通りに讀む必要はない。大體まづ亞
米利加のホイッシャア、ロングフェロオ、ホオムズ、ブライアントなどから讀みは
じめて、アアヴィング、ロウウエル、マコレエ、コルリッチ、シユレエなどに及むで

行くのが便利であらう。これで英米の文學者詩人には凡そ如何なる人があるか其人達は凡そどの様な人物で、どのやうな文體を用ひて、どのやうな事をおく人であるか、おぼろげながら會得されるやうになる。此書はかくの如く誠に便利な、重寶なものであるが、諸名家を列傳体にすらしとたゞ並べたばかりで、云つて見ればまあ一通りの見本を陳列したゞけのものであるから其諸名家相互の交渉關係とか、總じて文學の發達變遷して來た徑路とか云ふものは、殆んど知ることが出來ぬ。で、此方面の缺陷を補ふ爲めには、文學史を讀むことが必要だ。それには日本語でかゝれたものに、

◎文學博士坪内雄藏氏著 英文學史

がある。早稻田大學出版部の出版。全部一冊一千頁に亘る。記述も明晰、觀察もまた穩當、有益なる書物である。同じく日本語でかゝれた文學史に、

◎淺野和三郎氏著 英文學史

がある。其文章も記述のしかたも輕妙平易で、一々頭註がつけてあり、一章一章の末尾には參考書目まで擧げてあつて、誠に親切なやり方である。卷末には韻律の大意や、米國の文學史やが附録として載せてある。

前の『スキントンの英文學』の外に、日本で翻譯せられた名家文集は幾十種となくあるのであるが、一々擧げて行けば際限がない。中に就いて一つ二つをいへば、

◎Select English Poems.

三省堂の出版。バアンス、ユルリッヂ、ワアズワアス、シユレエ、キイツの五詩人の名作を選擇編輯したるもの。脚註がついて居る。

◎Selections from Seven Great Writers in Current English Literature.

これも三省堂の出版で、宮森麻太郎氏の編輯。最近文學の名作を集めたもので、拔萃したのと、全部のとある。所謂七大家とはラフガディオ・ハアン（小泉八雲氏、我が國に歸化して帝國大學及び早稻田大學に講師たりし人）フロレンス・モントゴメリー、ジェエロオム・ケエ・ジェエロオム、トマス・ベエレエアルドリッチ・ラッドヤアド、キップリング、エ・ユナンドイル、トマス・ハアデエの七人である。この中ハアン氏だけは故人となつたが、あとは皆現存して居る。書物の始めに各簡單なる作家の評傳がある。ハアン氏のは最も詳しい。最近英文學の一端をうかがふに足る。

◎Pancoasts' Standard English Poems.

これはまだ翻刻がない。英國の散文家を殆んど悉く網羅し、その小傳、短評を加へ、其抄録したる文章には註釋まで添へてある。スキントンの英文學

よりは後に出來丈けあつて、編輯の仕方もうまく、抄録したる範圍も廣い。此書の序文は文學研究者の參考になるから一讀するがよい。

◎Pancoasts' Standard English Poems.

編輯者は前者と同一人。編輯の體裁、抄録の仕方なども大抵同様だ。此書の序文も是非一讀するがよい。總じてどの書物でも、序文は往々不必要のやうに思ひ、讀まないで仕舞ふ人もあるやうであるが、あれは大きに心得違である。

拔萃抄録したものを讀むと云ふこと、初學の人にあつては止むを得ないのでもあるが、出來得る限りは避けたいものである。單に語學の稽古としてならば、それでも差支なからうが、眞に文學を研究するために讀むと云ふのなら、どの作であらうと、其作全體を通讀しないでは、ほんとうの面白味、ほ

んとうの價値は解らう筈がない。だから極く初學の間丈けは、英文學の大體を一瞥する爲めに、拔萃抄録にたよるのも已むを得ないとして、成るべくは一日もはやく完全な本文に就いて十分に其味を味つて見るやうにせねばならぬ。

拔萃物でなく、そして日本語の註釋のついたものを舉ぐれば、

◎内村達三郎氏著 『譯註失樂園』

有名なるミルトンの『失樂園』パラダイスロストの中、第一卷を譯し、これにその本文の解説を加へ、單語表を添へてある。第二卷以下はまだ出ない。

◎『標註ヱイカア物語』

ゴオルドスミスの“Vicar of the Wakefield”を淺野和三郎氏が流暢なる邦文に譯した上、丁寧なる標註を加へたるもの。別に本文を求めてその参考書と

すべきものである。

◎『標註クリスマス・カール』

ドイツケンスの“Christmas Carol”を之も淺野和三郎氏が、前書同様に和譯して標註を加へたるもの。

◎『標註スケッチ・ブック』

ア、ヴィングの“Sketch Book”を同じく淺野和三郎氏が和譯して標註したるもの。

此外にまだ色々なものが無いではないが、或は註解に太しい間違があつたり、さなくば原文其物が純文學として殆んど價値のないものであつたりして此際推奨したいと思ふものが非常に少い。で、註釋のついたものを選ぶにしても、やつぱり英吉利なり亞米利加なりで出來上つた原文の註釋書にたよら

ざるを得ない。それには我が國で最も普通に行はれてゐるものに。

◎Macmillans English Classics.

がある。倫敦の書肆マクミラン會社出版のもので、英文學中の名品傑作を選び、各之に丁寧なる解題と詳密なる註解とを加へたもので、誠に便利な重寶な書物である。今日までに出たのが已に二百冊近くある。註解者はものによつて異なり、一定して居ない。定價も書物の紙數に應じて、それ／＼違ふけれど、大抵は七八十錢から一圓五十錢までの間である。

註解書はその外にもまだいろいろあるが、この位にして置いて、次ぎには英文學の本文で、比較的廉價で手に入るものを舉げると、

◎Cassells National Library

が第一である。カッセル會社の出版。英文學には限らず、古今東西の名著を

網羅する仕組みであるが、英國で出来たもの丈けに、どうしても英文學が中心となつて居る。袖珍形の小本で、紙數は百二十二頁と限られて、定價は各十二錢宛。一二年前から赤い表紙のや、體裁の美しい新版が出たが、中は勿論同じである。それが一冊二十錢。今日既に二百數十種を出して居る。希臘羅馬の古典文學より近代は歐米各邦の文學に亘つて、有名なる作品は大抵残らずある。非常に重寶なものである。

◎Routledge's Sixpence Library.

これはルットレッジ會社の出版。極めて粗末な體裁の小説叢書で、丸善、中西屋あたりでは一冊二十五錢に賣つて居る。菊判の紙表紙で、活字も大抵は小さいが、價の安いのと、最近作家のものまでが收めてあるとで、やはり便利な書物である。

◎Chandos Classics.

一冊一圓宛、クロス製の立派な書物である。此叢書の中には詩人の全集が殊に多くある。

偕て次に英吉利以外の歐羅巴即ち大陸の文學に就いては、古いところで有名なものは大抵皆カッセル本などにも集めて居るからして、それはまづ其方に譲つて置き、茲には最近我が邦で最も多く讀まれて居る小説戯曲の類を一通り紹介して見ませう。

◎Century of French Romance.

これはバルザック、ドオデエ、デュマ、フロオベル、ゴンクウル、モオパッサン、メリメエ、ユウゴオ等佛蘭西近代作家のものを収めて居る。一冊三圓七十五錢、丸善にある。この著書の序文は立派なもので大に参考になる。

◎モウパッサンの小説

Aferdmer Series として紙表紙の粗末な體裁の叢書中に大抵收めてある。

一冊五十錢で丸善、中西屋に来て居る。“Short Stories”と云ふのが十一卷、

“The Pedler and Other Stories”と云ふのが一卷、外に“A Womans Life”と

“Ladies Man”との長篇もの二冊。

◎ドオデエの小説

“Jack” (二冊)、“Letter from my Mill”、“Tartarin of Tarascon”、“Sapho”

“Kings in Exile”などは一冊一圓五十錢で丸善にある。此中“Sapho”だけは

前のアフター、ヂンナア叢書の中に這入つて居る。

◎ツルゲネフ(露西亞)の小説

ガアネットの譯で、ハイネマン會社から出版した十五冊物の全集が一番よ

い、一冊一圓七十錢。近頃小形の新版をも出した。一冊一圓二十錢。體裁もなかく悪くない。それに次いで亞米利加で出來た Astor Library 中の英譯。一冊九十錢。譯は概して前者の方が立派なやうに思ふ。特に前者の序文は非常に面白いものだ。

◎トルストイ(同上)の小説

モオドの譯したのが一番すぐれて居る。すべて二十七冊もあるが、その中“Anna Karenina”(一圓七十五錢)“Resurrection”(一圓)“Kossacks”(一圓二十五錢)“Kreutzer Sonata and Family Happiness”(一圓二十五錢)などが最も有名なるものである。アフタア・ディンナア叢書の中にも“Kreutzer Sonata”の外二冊ある。

◎コルキイ(同上)の小説

“Foma Gordyeff”はペンペンバドの譯で二圓。“Orloff Couple and Malva”

は一圓七十五錢。“Three of Them”“The Outcasts”は共に五十五錢。

◎メレチニコウスキイ(同上)の小説

“Death of Gods”“The Forrunner”“Peter and Alexis”の三部曲となつてゐる。一冊づゝ離してよむでもよい。一冊一圓二十錢。

◎ズウデルマン(獨逸)の戯曲小説

“Dame Care”(小説)“Honor”(戯曲)“Magda”(同上)定價は二圓乃至二圓五十錢。

◎ハウプトマン(獨逸)の戯曲

“The Sunken Bell”“Hannele”“Lonely Lives”“The Weavers”等。イネマン會社出版の紙表紙もので一冊七十五錢。

◎ダンヌンチオ(伊太利)の小説戯曲

“The Dead City” “Francesca da Rimini” “The Triumph of Death” “Virgins on the Rock” “The Flame of Life” “Child of Pleasure” “Gioconda” “Victim” 等がある。一冊七十五錢。

◎イブセン(諾威)の戯曲

アアチャアの譯でハイネマン會社出版の『プロオズ・ドラマ』全集五冊(六圓各一冊一圓二十五錢)には散文劇十三種を収めて居る。この外に同じくアアチャア譯、ハイネマン會社出版、紙表紙の分冊で “John Gabrill Borkman” “Little Eyolf” “The Master Builder” “When Dead Awaken” (各冊七十五錢)の四冊、外に『モダアン・ブレンヘス』と云ふ叢書に “Love's Comedy” (二圓十五錢)及び別にアアチャア譯の “Peer Gynt” (一圓二十五錢)を加へ

て、以上十一冊十九種で、ほゞイブセンの戯曲は揃ふのである。

此外にまだいくらも讀むべき作家や作品やあるのであるが、一々擧げて行つては際限がなくなるから、まづ凡そ是位にして置く。

偕て以上、國文學、漢文學、外國文學と三方面に分ち、將來文學を以て世に立たんとする人の、是非讀まなければならぬ書物と、之を讀む順序や方法に就いて大體の注意をしたのであるが、今一つ序でに、新刊物、國の内外を問はず、一般に新刊物を迎へるのには、如何なる方針を取つたらよからうかと云ふ問題に關して一言して置きたいのである。

今日の如く出版物の多き時代に於て、下らない書物の澤山に現れると云ふのは誠に止むことを得ぬ次第である。單に下らないと云ふばかりでなく中には随分有害な書物さへも少からずあるのである。で、かくの如き時勢に

あつては、各自用心の上にも用心して滅多な書物に手を出さないことだ。殊に新しく發刊されたものなどは、一應世間の評判を聞いてからでなければ讀まないものと、先づきめて置くがよろしい。

世間の評判も、どこまでも信用は出來ないが、併し大抵書物の相場と云ふものは、二三ヶ月乃至半年もたてばきまるものだ。遅くとも一二年の中には動かし難い評價、即ち所謂定評が出來上つて了ふものだ。その定評を見た上で、はじめて讀むと云ふやうにすれば、馬鹿々々しい時間の空費も省かれるし、よくない感化影響を受ける危険も避けられる。

西洋のものでも、下らない書物は澤山にある。西洋人の手になつた創作でも、または評論でも、たしかな先輩の保證があるか、一應世間の定評を聞かした上でなければ、讀むものでない。總じて耳新しい作家や、作品に、手

を出して見度がるのは、人間の通有性で、また實に危険なる通有性である。

吳々も警戒すべきことである。

自分一個の經驗を云ふと、自分は此數年來、新刊の創作など、極く短いものや、また平生からその腕を信用して居る人のものは別として、大抵は皆一月後れに讀むことにして居る、かうきめてから後はだいぶその方の時間は經濟になるやうである。

尙ほ文學以外の讀書と云ふことや、圖書館並びに貸本屋の利用と云ふことなどに就いて、お話ししたいこともあるけれど、文學者たるべき修養の中で、讀書にのみ専ら重きを置くやうになつても困るから、まづ此章は是位にして筆を擱く。

第九章 經驗と觀察

苦がき經驗——人は各其經驗を誇大して考ふるもの也——人生に對する各自の管見——人生の一面——廣き經驗と深き經驗——自ら求めて苦むの要ありや——寫生帳と深刻なる經驗——天才と悲劇的運命——藝術に於ける報償——經驗は即ち運命也——觀察力の修養——多次の練習——客觀的態度

文學者の文學者たるべき修養として、所謂經驗なるもの、大切なることは第七章に於て已に之を説いた。そして其所謂經驗なるものも、特に人生の暗黒なる方面を経験しなければならぬ。換言すれば、人生に對して苦い經驗を積むた人でなければ、文學者になれぬ、大なる文學者にはなれぬと云つた。

偕てその人生に對する苦い經驗と云ふものには、色々の種類がある。肉體上の苦痛もあれば、精神上的の煩悶もある。肉體上の苦痛から惹起された精神上の煩悶もある。また所謂意地悪き運命の翻弄するところとなつて、悲惨なる境遇に陥るものもあり、先天の性格から生れ出た悲劇的没落もある。單に貧乏することが苦い經驗でもない。單に病氣することが苦い經驗でもない。單に事業の上に失敗したり、放蕩したり、墮落したりするのが經驗ではない、苦い經驗ではない。

ところが人間と云ふ動物は、兎角自分と云ふものを中心にして、物を考へたがる動物で、自分の樂しかつた經驗は勿論、隨分苦しむた事柄までも、誇大して考へるのが癖である。そして單に其事柄の範圍を誇大して考へるのみならず、其經驗したるもの、價值までも誇大して考へる。乃ち自分の經驗し

たる経験が、人生に對して、最も意味深きものであるかの如く考へるのである。

所謂事業家などと云ふのは、莫大なる資本を集めたり、運轉したり、また時には破産したりする、色々經濟上の浮沈と云ふやうなことを経験しない世間普通の人を妙に見くびつて、あんな奴に世の中が解るものかと云ふやうに思ひもし、口にも出して云ふ。貧乏人は、借金で苦められぬ人、衣食の心配なき人を、直ちに苦勞のない人間と見て、一面羨ましがりながら、また一面には馬鹿にする。金持の人にも苦勞はあると認めても、苦勞其物が自分達のそれに比べて、意味の少いものゝやうに思ひ、やつぱりさう云ふ人には世の中は解らぬと極めてしまふ。病人は病人で、病氣と云ふものを、人生の不幸なる経験の中、最も不幸なる経験となし、この自分と同じ苦痛を嘗めな

い人には世の中は解らぬ、人生の意義は解らぬと思ふ。失戀した人もさうだ。世の中に自分ほど苦しい目に遭つたものはない。また従つて自分ほど人生の苦い経験を嘗めたものは無いと思つて居る。放蕩者もさうだ。親父の金を盗み出してたわけを盡して居る大馬鹿者でも、大馬鹿者相應な理屈をつけて、自分丈け世の中が解つたつもりで居る。親父よりもつツと苦勞人のつもりで居る。

人生は廣いものだ。そして人間が人生を覗いて見る管は小さなものである。各自其小さな管から大なる人生を覗いて見て、自分丈けが人生を見たやうに思ひ、自分と同じやうに他の人もまた其各、の管を通して人生を見て居ることを知らずに居る。

小さな管から覗いても、勿論人生が見えないことはない。只だ貧乏をする

と云ふ丈けのことでも、以て人生を見るの管とすることが出来ないではない。戀愛の煩悶と云ふこと丈けでも、その煩悶にして痛切ならば、人生を見るの管ともなり得る。されば人は各其經驗するところによつて、人生を見て居るもので、自分丈けしか、或は自分と同種類の經驗をしたもの丈けしか、人生を見て居ないとやうに考へるのは間違だ。

まかしながら、管を通して見たる人生はどうしても人生の一部に止まる、一面に止まる。人生の全體、全方面に亘つて之を見ることが出来ないのである。

病床に臥して始めて人生を見たる人がある。其人の手になつた作物は、必ずしも淺薄なものではない。所謂人生と相渉るものがないとは限らぬ。しかし彼にしても、この病氣と云ふ事以外に何等の大切なる經驗を有しないなら

ば、彼の見たる人生は一面の人生で、其作物は人生の一面にしか觸れて居ないのである。

戀愛でも、さうだ。純潔なる愛、熱烈なる戀は、さながらにして人生の重要な意義を有するもので、殊に失敗に終つた戀愛は、嚴肅なる人生の經驗である。乃ち戀愛に於いて始めて人生を見たる人の作物も、必ずしも淺薄なるものとは限らない。しかし、彼にして若し、戀愛と云ふもの以外に、何等の痛切なる煩悶をも葛藤をも經驗したことがないものとすれば、恐らく其作物に現はれたる人生は一面の人生である。人生の一面にしか觸れて居なからう。

ひろく人生を見る爲めには、唯だ一つの管よりせず、種々なる管よりして人生を覗かねばならぬ。即ちひろく人生に觸れる爲めには、種々なる方面に

亘つて人生を経験しなければならぬ。

また單にひろく人生に觸れると云ふばかりでなく、深く人生に觸れる爲めには、痛切に苦い経験をしなければならぬ。

ところで、廣く深く人生と相亘ると云ふのは文學の第一義、乃ち文學者たるものは人生の種々なる方面に於て、痛切に苦い経験を積むと云ふことが必要なのである。

抑も人生は、樂よりも苦が多く、喜よりも悲の多いもので、稱してうき世と云ふものは、浮いて暮せの浮世よりも、憂い辛い憂世の意味である。已に憂世である。何人も多少の苦い経験をせずには日を暮すものはない。嘗に苦い経験をせずには日を暮すものがないのみならず、或る一方面に於いては、随分痛切に苦い経験をする人もあらう。が、しかし、中にはさうま 苦勞をしな

いで了ふ人もないことはない。もしさう云ふ人があつたらば、どうすればよいか。文學者となる爲めにどうしたらばよからうか。また、人生の一方面に限らず、廣く種々なる方面に亘つて痛切に苦い経験をする人と云ふものは、さう澤山にあるものでない。むしろさう云ふ、廣くして深き経験はしない方が多いかも知れぬ。さう云ふ人はどうしたらばよからうか。文學者となる爲めにどうしたらば、よからうか。

文學者となる爲めに、人生の痛切なる苦い経験が必要なからと云つて、故らに苦しい経験をしなければならぬものであらうか。現在の苦痛を一層深くし一層廣くする必要があるであらうか。

文學を人生の方便と見て、文學の獨立を認めない人達には、恐らく是は問題とならずに仕舞はう。蓋し、彼等の見るところを以てすれば、文學は單に